

# 善光寺の回國開帳

鷹 司 誓 玉

## 緒 言

近世善光寺の前立本尊開帳は信州本寺の如來堂において行われる「金堂開帳」と、他所に出張開扉する「出開帳」との二種に大別され、更に後者には江戸・京都・大坂に於ける「三都開帳」と、日本全國を勸進行脚して行われる「回國開帳」との二様式があつた。

故に善光寺の開帳についてはこれら金堂・三都・回國の三者を通觀せねば全貌を知り得ず、従つて善光寺信仰普及の實態を語る事が出来ない。且つて私は「善光寺の江戸開帳について」<sup>註1</sup>些か所見を發表させて頂いた事があるが、右の理由からして近世善光寺の開帳に關して未だ一面のみを考察したに過ぎなかつた。今回その補足の意味で他の面（回國）からの出開帳を語る機會を與えられる事を幸甚と存する次第である。

回國開帳は「巡國開帳」とも言い後に詳述する如く善光寺の二本坊・三寺中・四十院坊（現在は三十九）の山内が一體となつての大事業であるが、勸進巡行の實際的行動はその名の示す如く大勸進別當が中心となつて行つた。その爲大本願内の資料では断片的に日記類の中に關係記事を見出す程度で、纏つた記録の大部分は大勸進方に所藏されている。ここに數度に涉つて文書類の閲覽を許された大勸進並びに長野縣立圖書館の兩當局者に對し深謝の意

を表したい。なお前年のリポートに準じ引用資料を左に掲げ本文中には「」の略記を以て便宜上その題名にか  
えたいと思う。

大本願藏

。大奥御用日記（延享二年～明治四年までであるがそのうち該當年度のものを隨時抄出する）〔奥日記〕

。如來三都御廻國御開帳日記〔如來三都廻國〕

大勸進藏

。元祿五申年四月如來始而江戸開帳

元祿七戌年京大坂開帳

右三都開扉日記〔三都開扉〕

。元祿兩度開帳雜記〔元祿雜記〕

。回國道中記（元祿十七年～寶永三年までの日記五冊を一括に綴じてある）〔元祿道中〕

元文  
。寛保開帳勸化物帳（元文五年江戸・寛保元年京都・大坂の三都における出納簿）〔勸化物帳〕

。延享回國道中記（延享四年～寛延元年における巡行日記）〔延享道中〕

。安永七戌年江戸開帳中日錄〔安永日錄〕

。〔回國順路記〕（寛政六～九年の記錄）

。日本巡行用記第一～第五（寛政六～八年の記錄）〔巡行用記〕

長野縣立圖書館藏

大坂御開帳雜記

御下向道中雜記 放光院記（寛保元年五月十九日～晦日迄と表記があるが現在は廿五日以降を闕く）

〔大坂下向道中〕

。〔見聞舊事集〕（善光寺の行事法儀の記録）

。〔見聞舊事記副抄〕（善光寺如來堂再建記）

。善光寺別當傳略（歷代大勸進別當の傳記）〔別當伝略〕

## 一、概 観

善光寺の開帳がしばしば行われるようになったのは元祿年間以降であるが、これは一般的に見て徳川幕府の基盤が安定し四代將軍家綱以降數代にわたつて文治政治の實が上り所謂泰平の世が續いた時代である。就中元祿時代には諸文化が大きく開花して産業・商業・交通等あらゆる面で發展向上があり、庶民階級の生活にも物心兩面に多少の餘裕さえ見られるようになっていた。彼らは地域社會的或いは宗教的に互いに集結し各種の行事に進んで参加する風潮があつた。著名な社寺への參詣や、靈山登拜のための巡禮や、講社組織の發達などそのあらわれである。

そのような時代の爲政者「幕府」は諸種の文化事業に盡力しつつもあらゆる事象をすべてその配下において自己の權威を守り立てる手段にしていた。「生かさず殺さぬよう」に幕府に操作されていたのはひとり百姓のみならず佛教界と同様であつたと言えよう。表面的に見れば佛教は前代の爲政者織田・豊臣氏等からうけた如き迫害をうけなかつたばかりか、寺領を安堵せられ或いは師檀關係や諸法度によつて經濟的保證や社會的地位の確立をも與えられていた。而し反面一般寺院は本末關係によつて段階的に大寺に統括せられ、各宗ごとにそのピラミッドの頂點は幕府直屬の本山に到るのであつてあらゆる行爲が拘束規整され、いわば佛教界全體が俗權により監視せられていた。

五代綱吉の頃には生母桂昌院の佛教篤信の故に彼女や柳澤吉保によつて保護・造修築を得た寺院は枚舉に遑ない程で、善光寺に對しても本堂再建に對する協力や、江戸出開帳の折には如來を招待して拜禮寄進の事等を行つてゐる。各地の諸候もこれにならい領内の菩提寺や近在の寺院に應分の援助を加えたが物質的安定と法度による制限は僧侶を無氣力化し、殊に徳川中期以降儒教や神道の興隆に比して仏教は全くの沈滞狀態に墮して行つた。

而もあからさまな迫害がないというだけの事で嚴密に言えば徳川幕府と雖も佛教界の繁榮は決して望んでは居ず、むしろ回祿や無住となつた機會をとらえて廢寺とし、少しづつでも寺院數を減少して行こうと企てていた。「新地奉行」の設置もその意圖によるものであつて新地寺院の亂立増加を防ぐべく嚴重に調査取締りを行つたが、新地のみならず古跡寺院に對しても再興や修覆には非協力的で、しいて寺側が造營を志す場合は自力で勸進して費用を辨ずべきであるとし、修築の際にも種々の制限を加えられた。而してその勸進の手段としてしばしば行われたのが秘佛の開帳である。

尤も寺塔や佛像の造立修覆等のため勸進が行われたのは徳川期が最初ではなく、古代末期以降高野山・東大寺・鞍馬寺・四天王寺等が諸國に派遣した勸進聖以來の傳統がある。

律令體制の崩壞や莊園の變質化によつて古代末期から中世にかけての諸大寺がその經濟を維持するには貴賤の喜捨に頼らねばならなかつた。<sup>註3</sup>五來重氏の研究によれば當時の聖達は必らずしも一ヶ寺の專屬ではなく、專問の僧侶でもなかつたので信仰内容も神道的・修驗道的・時宗的など種々雜多で、その行儀も引聲念佛・法華懺法などを兼ね行つたといわれる。而して宗教的權威を象徵するものとして笈の中には何某寺の勸進僧であるとの證明書（勸進帳）や各々の本寺の本尊の寫し（不動・觀音・彌陀・地藏・聖德太子・弘法大師などの何れかの彫畫像や名號）

を守り本尊として納め、遊行の先々ではそれら佛菩薩高僧等の權化或いは使者として遇せらる可く自ら宣傳し“或いは「出開帳の形で禮拜させ”た事もあつたろうと考察していられる。

斯様にミニチュアな携帯用模像をひじり個人が肩に擔つて遊行していた前代のすがたに比して、近世の勸進は本尊そのものを輿にのせその寺の専門僧職者が中心となつて奉持し、多くの在家信者をも動員しての大規模華麗な「出開帳」の行事に發展したと見てよいであらう。

近世の權力者即ち幕府や諸大名家は前述の如く佛教界の勢力の振興を警戒していたので檀越とはならず、勸化開帳の願出があれば人馬繼立の手配や篤志家の個人的寄進を行う程度で財政的援助は何ら行わなかつた。それすらも徳川時代初期に行われた東大寺大佛殿再興(貞享元<sup>1684</sup>年)・寶永二<sup>1705</sup>年、興福寺再興(享保十<sup>1725</sup>年・有徳院殿御實紀附錄)。根來寺本堂及び大門再興(寶永四<sup>1707</sup>年)。熊野三山權現修理(享保七<sup>1722</sup>年・隆光僧正日記)等の勸進については公儀が大名以下への勸進帳の廻し方、奉加金の取集め方まで細かく指定して寺社に協力的であるが、漸次寺社の勸進が増加して際限もない程となつたので、むしろ制限を加える方針に移つてゐる。例えば寛延三<sup>1750</sup>年四月には寺社奉行に對して

近年寺社建立又爲ニ修復ニ御免勸進之儀多願出候 公儀御建立地且至而譯も有之候ハ、格別 左も無レ之分 向後取上に不レ及 願出候ハ、難レ成段申聞、可レ被ニ相返ニ候<sup>註4</sup>

と公儀によつて建立されたもの、或は特に由緒あるものの他は勸化を行う事を許さぬように定められた。又寶曆九<sup>1759</sup>年には從來は強制的に各家毎に勸化せしめていたのを、志のないものは出さなくてもよいようにし、安永二<sup>1774</sup>年には特に由緒あるもの以外は在町役人による勸化物の取集めを行わぬよう指令が出された。

一般の寺社のみならず輪王寺門跡や東叡山寛永寺・増上寺に對してさえも山内の建造物の再建や修覆には幕府から縮少や再建無用の指示をうける事がしばしばで、<sup>6</sup>「小破の中に自ら修理し、大破になつてから勸化を願う事なきよう」などの達しが出されている。これらの方針は當然各地方にも波及し、諸大名家でも領内の寺院修造には同様の取締りや制限を加えている。

元來「開帳」は平素は堂奥に收藏され神秘化されて近づき難いものとなつてゐる靈佛を一定期間内に限つてたま／＼開龕し、善男善女に禮拜結縁せしめ、その淨財を以て堂塔の修理復興の費用に充當するものである。しかし次第にその効果即ち收益金の大きな事のに意が用いられ、本尊の莊嚴を徒らに飾り立て、他地方からの出開帳の場合など特に誇大に宣傳して人よせにつとめるものもあり、低俗な地獄極樂の因果物語をとき或いは現世利益の祈禱を行い守り札や御影その他を頒布して収益を計つた。更には開帳場周邊に大小の幟をたて、小屋かけの見せ物や水茶屋等を假設し、さながら遊樂の巷となる場合もあり、度々公儀から制限の指示が出されている。<sup>5</sup>尤もこれは大都會の開帳場の實情で、いわゆる三都などでは泰平になれた庶民の遊興娛樂を求める氣分に迎合した<sup>7</sup>「おまつりさわざ」の如き例が多かつたようである。これに對し精神的にも物質的にも恵まれぬ地方の人々の間には純朴な信心が根深く存續して居り、出開帳を迎える態度も眞劍であつたと思われる。

善光寺出開帳の傳統は古く明月記<sup>註6</sup>（嘉禎元年1235年閏六月十九日の條）や實隆公記<sup>註7</sup>（永正五1508年六月十一日の條）に京開帳の事が見えているが、近世において伽藍再建や修覆資金勸募の必要上瀕繁に行われた状態を表示すると次の如くである。

（第一表）

第一表 略 年 表

	A D	年	理 由	責 任 者	回 國 範 囲	備 考
	1642年 66 92 94 97 1700 01	寛永19年 寛文 6 元禄 5 〃 7 〃 10 〃 13 〃 14				善光寺焼失 〃 再興 第一回江戸開帳 〃 京・大坂開帳 善光寺改建始る 〃 用材焼失 第二回江戸開帳
第一回 回國開帳	〃 1706	〃 寶永 3	本 堂 建 立 の 爲	大本願智善上人 大勧進戒善院慶雲	奥羽・關東・東海道・中國 筋・九州・四國・北陸方面	この間に再建始る
	5 14 40 41	寶永 4 正徳 2 元文 5 寛保 1				善光寺本堂落慶 〃 堂門等地震で小破 第三回江戸開帳 京・大坂開帳
第二回 回國開帳	1747 1748	延享 4 寛延 1	仁王門・經藏・鐘 樓堂建立の爲	誓興上人 靈山院香巖	北陸・奥羽・關東・甲州路	
	50 58 59 78	〃 3 寶歴 8 〃 9 安永 7				山門・鐘樓完成* 仁王門完成 經藏完成

第三回 回國開帳	80 ゝ 82	〃 9 天明 2	國家安全祈願結縁 國老女人等と爲 五重塔建立の爲	智觀上人 靈山院落藏	畿内・紀伊・東海道・關東 ・北陸方面	京・大坂開帳から引續き 回國・大勸進別当道中に て病歿
	1789	寛政 1				大勸進万善堂等建立計画
第四回 回國開帳	94 ゝ 98	寛政 6 〃 10	前回中絶のあとを 引續き行う	智昭上人 清淨林院等願	北陸・山陰・山陽・九州・ 四國方面	天明寛政年間にかけて諸 臺門修理行う
	1803 19	享和 3 文政 3				第四回江戸開帳 第五回江戸開帳
第五回 回國計畫	35	天保 6	天下泰平祈願及び 結縁のため	智昭上人 圓覺院光純		公儀より許可を得たが山 内の反對にあい願下げる
	47	弘化 4				金堂開帳中大地震にて仁 王門・大本願その他被害 甚大

鐘は寛文 7 年鑄造  
\* 鐘樓はその後改建現存す  
るのは嘉永 6 年重建のもの

# 中でも回國開帳は

- 一、元祿一四年九月～寶永二年三月八日（五年六ヶ月）
- 二、延享四・三・一三～寛延元・九・二三（一年六ヶ月）
- 三、安永九・三・一六～天明二・六・二五（二年三ヶ月）
- 四、寛政六・八・三〇～寛政一〇・六・二二（三年一〇ヶ月）



の計四回行われ、第五回目が天保年間に計畫されたが實行には到つていない。これによつても明らかなように第一回回國が最も長期にわたつてゐるが、第三回は後に詳述する通り大勸進別當の道中にての病没という不慮の災で回國中絶となつた爲、十二年を隔てた寛政年間に後住により前回の繼續という形で回國がなされた。故にこの第三、四回は一連のものとも見得るのであり、兩度を通算すれば六年有餘にも上る最も広範圍な巡行であつたと言える。

何れにしても出開帳を行うに當つては約一年少くとも半年以前に善光寺において兩本坊及び山内の意見をとりまとめ、大勸進役人を通じて東叡山に申出その「御添簡」を得て寺社奉行所並びに新地奉行所に願出る。願書の内容は何時から何處の地方に如何なる理由によつて出開帳したい。又第二回目以降であれば先例を掲げ、前回から何年目に相當するかを明記する。公儀への願書提出と同時に大本願上人からは青山善光寺（大本願上人の兼帶所）を通じて江戸城大奥老女方に私信の形で同趣の件を願ひ出る。公式に奉行所からの免許を得て後はじめて爲知札を建て回國に出興する。北は青森から南は九州鹿兒島まで壹岐・對馬・佐渡を除き當時の日本全土を巡行している。各地における開帳期間は極めて短かく、例えば第一回回國において（前半の資料を欠くが元祿十七年以降寶永三年歸山までに開帳した計百十四ヶ所の中）最も多いのは三日乃至二日間の出開帳であり、次いで一泊した翌日の「一日開帳」、或いは到着當日の夕刻のみに暫時行つて翌朝早速出發する所謂「着開帳」「夕開帳」、道中の途中で晝食の折に行う「暫開帳」などと稱される僅か一〜二刻程の短時間の場合が多い。即ち

一日一七ヶ所・二日間二四ヶ所・三日間二六ヶ所 四日間八ヶ所・五日間一〇ヶ所・六日間九ヶ所  
七日間一二ヶ所・八日間二ヶ所・十日間四ヶ所・十五日間一ヶ所・三十五日間一ヶ所・

である。又全四回を通觀しても十日間以上逗留開帳を行つた場所は越年の地を除いては次の十八ヶ所を數えるの

みである。

隅本（熊本）・徳島・出石・所口・萩・廣島・福岡・長崎・仙臺・八王子・千住〓十日間。

成田〓十一日間。

押立村〓十四日間。

鹿兒島・大相模村〓十五日間

甲府〓十七日間

金澤〓二十五日間（第一回）・十五日間（第四回の場合）

江戸本所〓開帳期日は不明であるが六十五日間逗留。

いづれも人口密度の濃い都會地、或いは近在から參集しやすい交通の要衝的土地である。

善光寺のみならず諸寺が競つて開帳<sup>註。</sup>を行い前述の如く大衆娛樂場化の傾向にあつた三都での近世出開帳の雰囲気

に比して、日常生活にも事欠きがちな零細な庶民はたま／＼遇い得た開帳佛を大きな感激を以つて迎えた。限られた小地域内で一生涯農山漁業のいづれにか運命づけられている各々の勞働に従事し、僅かな氣象の變化にも忽ち生命をおびやかされていた人々は現世に絶望し、來世救済を願う心も切實であつた。或いは祖先崇拜や農耕儀禮等に觀音信仰・彌陀信仰や念佛行事等を加えて土俗化した信仰をもち、自分なりの乏しい知識や經驗から個人又は小集團（講など）によつて大寺の勸進に應ずる事も滅罪生善・後世安穩の一手段の如く解して僅かに心のより所を見出していたと考えられる。僻遠の地方で善光寺の出開帳がいかに歓迎されたかについては〔元祿道中〕〔延享道中〕等の記録中に多くの例を見出す事が出来る。即ち

元祿十七年八月九州回國の折鹿兒島と大隅の國府との間の舟つき場嘉志木において「鹿兒島より陸五里あり遊行其外御上使たりといへとも是迄なとてハ入不申 鹿兒島へハ入事不叶 今度ハ前代未聞之御事とて御城下にて御開帳也」と一日開帳がよろこばれ、同年十一月十一日に四國伊豫川ノ江から讃岐圓龜への途次一泊した大野原では大野原村町内少行出口左リニ日蓮宗慈雲寺と申御一宿之（中略）達而如來の御輿御入被遊被下候由相願申候ニ付則御一宿之、同四ツ時御着即刻兩人願ニ付着開帳七ツ半迄、日蓮宗にて如來ニ皈依いたし候事前代未聞ニて開帳御差條も大念佛にて參詣ハ貴賤群集をなし誠に三國無双ノ如來ノ御威德難有 云々

とある。又延享四年四月八日越後の興板で淨土眞宗の明元寺に一泊した時の記事は次の如くある。

此所開帳場所ニ相定不申處殊の外大勢參詣有之有難く存じ仕候 町の人にて一切通る事成不申少々の間開帳願ひ申候間開帳なされ候へども右の人々出る事も入る事も成不申 足輕衆大勢出申してふせぎ候へども殊の外町はひとつまり 城主の了簡ニも及び申さず 則ち閉帳なされ候へども夜に入候迄は人死出來候程の事に御座候この他「殊の外御繁昌なり」との記録は隨處に見えている。

なお次に第一回以下の回國經路を見るに先だつてそれとほぼ同時に行われた三都開帳並びに、善光寺本堂の寶永再建の實情を見ておきたいと思う。

#### A、寶永度本堂再興

寶永十九年<sup>1642</sup>燒失した善光寺本堂は慶安三年<sup>1650</sup>に假建築、寛文六年<sup>1666</sup>年に本建築が一應完成したが小規模であり、何分應急的建物であつて堂塔の諸施設も整わず、建立後三十數年を経た元祿五年にはすでに老朽化しつつあつた。而も民家に接近しているので火災の危険率も大で（その立地條件故にこそ過去幾度も回祿<sup>註9</sup>して居り）移轉の必要に

せまられていた。一日山内の堂照坊という小御堂で僧覺道の説く繪縁起をきいた大勸進の本孝法印が、これを用いて他地方で勸募を行う事を思いつき、大本願とはかり誓傳上人と連署で寺社奉行に願ひ出で、三寺中の協力によりはじめて江戸開帳を行う事となつた。〔如來三都廻國〕に見る願書文面には

（前略）皇極天皇勅願所にて七堂伽藍ニ御座候 中古ニは頼朝公御再興其後公方家打續御崇敬之由縁起ニ御座候別而權現様高千石餘之寺領御寄附被下候、因茲天下安全之御祈禱長日無怠慢勤來毎年卷數獻上仕候 然ル所往古數度致災燒候故ニ再興漸々減少仕 本堂茂假堂故及大破 殊ニ寶塔樓門等茂只今礎石而已相殘候間今度於御當地並京大坂縁起講談仕存寄之 奉加御座候ハ、本堂修覆仕塔樓門等再興仕度奉願候 御赦免被爲仰付被下候様奉願上候 以上 善光寺

元祿五年四月九日

大本願誓傳上人 判

本田紀伊守殿

大勸進本孝法印 判

戸田能登守殿

松浦臺岐守殿

とある。これにより元祿五年六月五日から五十五日間江戸本所回向院で開帳があり、又同七年六月二十四日から京都、九月十四日から大坂で各三十日間づつの出開帳が行われた。

この三都開帳では日月牌や御印文頂戴、祈禱札授與等による一般参詣者からの冥加金も少くなかつたが、寺側では更に大口の寄進を得る可く上層階級との結縁に積極性を示している。例えば江戸では東叡山の協力と大本願上人の大奥への働きかけによつて「お城入り」<sup>註10</sup>を行い、その他諸侯の江戸屋敷にも如來を奉持して尊信を得、多大の信

施をうけている。又開閉闢の法要には江戸の場合は東叡山から、京都では比叡山・黒谷から、大坂では百萬遍・知恩院・黒谷から各々八十人乃至百五十人にもぼる多數僧侶の出仕隨喜を得、その他各宗の<sup>註11</sup>大寺門跡公家衆諸大名家の參拜や奉納もあつて「集る所の淨財一萬金」といわれる程の收益があつた。

これら各界上流との接觸には公家や大名家の出身で上人號常紫衣勅許の大本願上人のネームバリューが與つて力大きかつたのであり、又直接寺門經營の衝に當る大勸進別當が東叡山並びに日光輪王寺宮に常に親近して當寺の存在を主張し、その權威を強力な後盾として種々の便宜が計られたのであつた。

又徳川時代の大坂は全國商品經濟の一大中心地であつて、水利に恵まれた交通の要地でもあり商人階級が大きな力をもつていた。その地においては灘波堀江よりの本尊出現の傳承、或いは善光寺如來と聖徳太子の贈答歌傳説等を強調し、古くから大坂で篤信されていた太子信仰と結合して開帳禁止の時代にも善光寺の大坂開帳は特に便宜を與えられている。「三都開扉」にある「元祿七申戌年七月 寺社奉行へさし出候口上之覺」は次の通りである。

一、善光寺如來之儀は難波之浦より出現 殊に聖徳太子此本尊爲守護日本ニ御誕生之由緣起にも有之 旁御由緒之場所に御座候間開帳奉加共御赦免無御座候而は本尊之威光も薄罷成諸人失信心建立も罷成間敷候哉と存難儀奉存候間何分にも御了簡奉願候

尤御停止之場所と御座候上は無是非次第ニ御座候得共外様之本尊ニハ各別之儀ニ御座候間右御由緒之段是非被仰上被下候様ニ奉願候

一、開帳之義御停止之場所ニ而不罷成候ハ、右之通聖徳太子御崇敬之本尊ニ御座候間 暫天王寺江本尊奉入緣起致講談 如來之御由緒諸人ニ聽聞致させ偏ニ本尊之威光諸人之信心も薄罷不成候様奉存候間何分にも御了簡奉願候云々

その結果開帳が許され相當莫大な淨財を得、信者龜屋何某等の有志の協力で鐵眼の黃蘗版大藏經の寄進を受けた。當時は貨幣制度が一貫して江戶では金、大坂は銀を本位としていたので勸化金をそのまま信州に持ち販る事は出<sup>註12</sup>事ず兩替商の仲介を経ねばならなかつたようである。なお開帳場を提供された天王寺から開闢に際して善光寺如來前に白銀五十兩、盛物六杯の供養がなされたが、善光寺は開帳後の十一月十二日「太子江善光寺より白銀千兩奉納」「如來三都廻國」を行つてゐる。又悲田院等による貧民救済の聖德太子の精神を繼承する四天王寺の有り方に模つてかこの時の大坂開帳では多大の喜捨を行つてゐる。

「三都開扉」を見ると元祿七年十一月三日大勸進の寺役人山崎藤兵衛が、翌四日豫定通り閉帳する旨奉行所に届出した所、遠國から船で参詣の輩に未着のものもあるとの事で六日間の日延べを許され、そのうち後半の三日間は「爲貧者御印文頂戴之儀不及冥加錢結縁候様被仰渡」て、特に十一日には如來前において悲田院、鵺田道・道頓堀・天滿の四ヶ所の垣外之者に御印文寫しと米錢を併せ與える事を許可されたとある。十一日の記録には

本尊奉拜之施物ハ長吏に渡之候 四ヶ所之手下並ニ鉢開外之札非人等ハ御印文渡所ニて一人ニ米一升ツ、引御印文頂戴所ニ而御印文寫一枚ツ、渡之如來前を通り

東え小門江通拔

鳥目 二拾貫 悲田院

米 四石

鳥目 二拾貫

米 三石七斗七升 鵺田道

米 三石一斗七升 道頓堀

米 二石二斗六升 天満

右四ヶ所垣外の千三百人及び

外札之非人 六百二人

町之非人 百二十四人

鉢開坊主男女とも八百九十三人

とあり、更に寺外の小夜（屋カ）場夜廻りをつとめた四ヶ所垣外の者達に、天王寺村の庄屋兩人を通じて鳥目五十貫文を遣し、總計五千六百三人に對して米五十六石三升、鳥目百貫を施與したと見える。

法施と共に財施を行ずる事は衆生濟度の具體的行爲であつて、開帳佛を拜せしめ御印文札を授けると共に米錢を施した事によつて社會の底邊にいる人々の間に廣く深く如光寺如來の名をしらしめ教化の實を上げ得たであらう。就中極樂への來世往生を約する御印文札を大量に配布したのは、中世の遊行上人一遍の賦算と相通ずる性格のものと言えよう。

因みに四天王寺と善光寺の間に介在する「ひじり」的性格を今少し考察しておきたい。この兩寺の關係についてはつとに五來重氏<sup>註13</sup>が指摘せられている所であるが、傳弘法大師作「上宮太子廟參拜記文」即ち太子及び妃・母の三骨を一廟に祀つた河内磯長太子廟に空海が參詣し蒙つた啓示を刻んだという廟窟内の文も、右三骨を彌陀三尊なりとして「思念を九品の淨刹に成して往生を安樂の實池に逐ぐべし」と、聖德太子と阿彌陀如來が共に念佛者を往生させる事を記し、あたかも高野聖と善光寺との合作のような感があると言われている。

一がいが高野聖といつてもその中に重源一派の「勸進衆」、明遍一派の納骨回國に従事する專修念佛者の集團「道心衆」、覺心一派の文學藝能に特色を有する「唱導衆」などあつたように、善光寺の住侶も中世にはすでに大略三系に分れていた。大本願を中心とする中衆と、常念佛を修する「妻戸衆」と、大勸進を中心とする「衆徒」がこれである。近世においてはこの三寺中は淨土宗・時宗・天台宗の各宗派色を確立し漸次専門僧職者化するが、なお善光寺自體は超宗派的道場として各宗僧侶を包容し、落慶供養や開帳等の大行事に際しては三者が混然一體となつて當つて居り、傳統的法儀のはしぐにも原始宗教を含めた聖的性格や行動が存續している。殊に開基者善光の末裔としての傳統を世襲して來た中衆十五坊（現在は十四坊）は何れも若麻績姓を稱する妻帶者で半僧半俗の生活を営み、男尊女卑の思想濃厚な封建時代をも通じて常に尼僧の本願上人を「如來の御杖代」として頂き、越年に關しては潔齊別火、四方祓その他古神道的色彩の強い一連の行事を主催し、就中堂照堂明の二坊は如來前の常灯を維持し祖先の火を守る特權を有していた。

一方近世善光寺の住侶には古代中世の聖達の特性である所の隱遁性・咒術性等はも早や見られないが、寺門經營の爲諸回を勸進遊行するという回國性は依然失つていなかったといえる。その頭目たる大勸進別當は有能な事業家であり、廣く世人の尊敬信頼をうけるに價する人格者でなければならなかつた。平素は天台宗に所屬するので東叡山や日光門主と直結し、上方に到つては堂上貴伸と關係を深め除災招福の密教の祈禱修法を修するカタワラ、地方に巡化しては廣く庶民の間に浸透している念佛を勸めている。天台宗に於ても勿論四修三昧中に念佛修行をすすめるのであるが、回國勸化中にはしばしば往生のため「十念授與」を行い、結縁のため「大念佛」を修し「融通念佛血脈」を授け、疾病や凶作の原因と信じられていた凶厲魂を鎮める護符として「御印文札」を頒布するなど、現世利



益も説く難行雜信仰の俗聖的性格が隨處にみとめられる。

更に時宗聖は六字名號摺札を一人／＼に配る賦算を行つて教化者の數をとり、千人萬人等一定數に達すれば記念に大念佛會を供養しているが、近世善光寺でも常念佛が<sup>註14</sup>行われ三萬五千日回向（安永二年<sup>1773</sup>）・四萬日回向（寛政二<sup>1791</sup>）・四萬五千日回向（寛政十一<sup>1799</sup>年）・五萬日回向（文化八年<sup>1811</sup>）六萬日回向（天保三年<sup>1832</sup>年といふ呼稱で金堂開帳を行い、別事念佛を修している事も見のがせない。

これらの事からして善光寺の三寺中は別個の三宗が集合して出來たものではなく、本來半僧半俗の一族のものが次第に分れて行つたと思われる。古來南都の諸大寺では「堂童子」と稱する有髮の幼童を置いて法儀に關する雜事を辨ぜしめ、或いは修業僧の衣食の世話をつとめる道心者を置き、いづれも從者の身分に止めてあつた。そのような在家と出家の區別組織が判然としていない善光寺は土俗的な信仰形態を信州という孤立した地理的條件の故に他からの影響をうける事なく、僧俗混同の古い形のまま近世にまで傳えて來て居り現在では中衆僧侶が交互に一定期間内のみ「堂童子」をつとめている。<sup>註15</sup>「別當傳略」を見ると大勸進の歷代住職の傳記であるに拘わらず初期には始祖若麻績東人（後稱善光）以下十五世まで若麻績姓の人を擧げ、現在の大本願末の中衆と系譜を同じくして居り、それ以降二十六世までは丈部姓で、すべて「大檀越」と冠稱してある。二十七世以後には姓及び世代を明記せず勸進上人、別當檢校、大阿闍梨、主事などの呼稱を以てし、他寺から派遣せられる専門僧侶（清僧）になつてゐる。然して主事律師圓西公（應長く正和年間）以降歷代住職の入山の項には「補我別當兼大勸進」とあり「大勸進」の語を個人に對する職名の如くに用いてあり、これを一ヶ寺の寺號としたのは近世以降公文書等に記入の必要上から衆徒の本坊名になつたと考えられる。

これらの事から若麻績一族は善光寺如來並びに三卿（開基者善光・妻彌生・息善佐）を祖先神の意味で奉祀し、妻帶僧が世襲的に寺を管理して居り清僧よりもむしろ妻帶僧に主動權があつたように考えられる。そのうち募財の必要が生ずるに及んで彼らのうちから、信徒との交渉が多く經濟觀念が發達して居り、經營の才のあるものが自づと勸進の任務にたずさわるようになり、如來前の香灯飲食等の供仕をつとめる中衆と判別され、更に日常の役儀の上でも勸進系の衆徒は本願系の中衆に對立して如來靈龜の開帳の役を分擔するようになったと解される。

なおこの二系統の他に「妻戸」と稱する五坊があり、貞享二年以降天台宗に改められ現在も大勸進末に所屬しているが、貞享以前は時宗に屬し常念佛を修する集團であつた。吾妻鏡五一に（弘長三年）三月十七日北條時頼が信濃國深田郡の水田十二町を「善光寺不斷念佛衆及經衆」のため寄進したとあるのもこの系統であらう。或いは時宗の祖一遍聖人も文永八<sup>1271</sup>年・弘安二<sup>1279</sup>年に善光寺に參詣し踊躍念佛をすすめ衆人大いに歡喜した様が一遍聖人繪詞傳にあり、或いは「十二院河原」「常念佛堂」などの舊跡の存する事から中世における時宗妻戸衆の存在は善光寺の組織上不可欠のものであつたと考えられる。故に現今善光寺塔頭を一括するに「兩寺中」の呼稱を以てするが、近世文書には妻戸が天台に統攝せられた後も相當長らくの間「三寺中」と記されている。

先にのべた如く元祿五年及び七年に行われた三都開帳は本堂修覆の爲の勸進であるから、早くも元祿六年には工事が開始されている。〔見聞舊事記副抄〕等によると六年十二月廿一日釘（ちような）始め、同二十七日地割りになされ、高さ九丈五尺（但し石面より箱棟まで）・桁行二十九間三尺一寸三分・梁行十三間七寸二分のプランで着工された。所がその業未だ成らぬうち元祿八年九月二日中心人物であつた本孝法印が病没し、同十年二月「御普請はじめ」、十二月十五日戸隱山勸修院も出席して「御地祭り」が行われたが、十三年七月二十一日下堀小路からの

出火に罹災した。大本願の文書類によると町家百二十三軒・堂庭小屋十のうち四棟・善光寺山内の全塔頭が焼失し、建立中の金堂はじめ折角長期にわたり集荷されていた建築用材も盡く灰燼に歸し、資材並びにこれ迄の人件費を加えた被害總額は約四千八百七十兩に達したという。本堂建立は再び第一歩からやり直さねばならなかつたが、當時本孝のあとをついで別當であつた見海は在職滿五年でこの類焼にあひ引責辭職したので、十二月二十一日東叡山より派遣された戒善院慶雲が「別當兼大勸進」に補せられその任に當る事となつた。時に三十八歳、新しい意慾にもえて直ちに開帳による勸募を企畫した。

彼は入山の翌年(元禄十四<sup>1701</sup>)三月十日から谷中感應寺における江戸開帳、同九月から五年半に及ぶ日本全國への出開帳を行つた。同時に國元では本堂造營が着々と進捗し、回國の終了後間もなく建築も完成して寶永四年八月十五日落慶入佛がなされた。これが現存する善光寺如來堂である。〔見聞舊事記副抄〕よりその工程を略記すると左の通りである。

元禄一四年三月一〇日〓江戸開帳始る

同 年三月      〓松代眞田侯公儀より善光寺普請の監督を命ぜらる

同 年五月一〇日〓江戸開帳終る

同 年九月      〓回國開帳始る

同 一六年五月一日〓江戸より大工棟梁木村萬兵衛來・木寄する

寶永元年九月      〓細工始

同 三年四月一六日〓柱建

同 三年八月一日 同 回國開張終る

同 四年六月 同 眞田伊豆守參詣（視察）

同 年七月一日 同 上棟

同 年七月二日 同 成就

同 年八月一日 同 兩寺渡

同 年八月三日 同 日光門主より東山帝の宸筆般若經下賜・常然より後西院帝の御名號寄進される

同 年八月九日 同 上野御名代圓覺院着（宿坊藥王院となる）

八月一日 同 末之上刻入佛

八月一日 同 安鎮

八月一日 同 供養（導師圓覺院權僧正常然、兩寺以下一山大衆國中の會衆西方寺より行列にて入堂法要）

かくして從前の本堂よりはるかに大規模なものが大勸進の北に南面して建立せられた。（從前のもものは天和三<sup>1683</sup>癸亥年の圖面等によつても知られる如く大本願・大勸進は各々現在ヶ所にあつて兩本坊の中間に本堂があり、而も四

門四號の名稱からしても古くは東面していたと言われている。）同しく〔見聞舊事副抄〕によると本堂は高さ十丈

二尺八寸四分・長さ三尺八寸四分・横十七間一尺二分で

柱數 一三六本

垂木 七四六本（下重軒）

同 七四六本（上重軒）

おも垂木 一、三九六本

小軒垂木 一、四四六本

袖垂木 三、〇六八本

屋根坪數 一、七〇〇坪餘

造營に動員されたのべ人員は

大工 一六三、二六二人

大工補助 二〇、〇四〇人

木挽 七三、六二〇人

大工手傳 一〇、二〇〇人

總工費は

金 二四、五七七兩

うちわけは

屋根工料 七三〇兩一分五匁五分

手間賃 大工一人は付二匁八分、手傳同一匁五分、木挽同二匁八分、木挽手傳同一匁五分などの割合で支拂われた。

なお回國開帳によつて得た資金は不明であるが〔元禄雜記〕にある三都での收支の概略は第二表の通りである。

## (第二表)

第二表 勸化金と建築費の關係 (但シ第一回回國による奉加金は不明)

		奉 加 金	開帳中入用差引 残高 (純益)	再建に用する主要經費 (支 出)
元祿 5 年	江戸開帳 (55日間)	金 28,574兩 1分 674文	金 9,900兩餘	火災被害總額 金 4,870兩
元祿 7 年	京都開帳 (66日間)	金 7,400兩餘		
	大坂開帳 (57日間)	金 237兩 銀 70兩 488匁 5厘 錢 41,523兩 316文 雑投 5匁 實帛 219兩	金 10,000兩	
元祿13年				
元祿14年	江戸開帳 (60日間)		金 3,500兩	本堂建立費 金 24,577兩
寶永 4 年				
小計			金 30,800兩	金 29,447兩

11' 回國開帳の經過

第一回の回國は上述の如く元祿十四年三月から五月にかけて六十日間行われた江戸開帳に引續いて同年九月から行っている。即ち先の申年(元祿五年)以來三都開帳を行つたが未だ豫定の額には達しないので回國勸化したい旨

を恐らく前年戒善院慶雲の別當就任後間もない頃願い出で、その最初に谷中感應寺での江戸開帳を行ったものと考えられる。同所で五月十日閉帳の後善光寺へは戻らず一同千駄木の保福寺に移り態勢をととのえ九月の出興に従ったのである。この時の公儀えの願書には

(前略) 先年申年より集高不足に付又候御公儀江日本國勸化奉加仕度巨細御願立仕候處被仰付候 本堂普請之儀は眞田伊豆守様御家來中御肝煎被成候様ニ御公義より御内定を以兩寺より御頼御座候

本願上人ニは女義之事ニ御座候得ば回國不致共 信州ニ而伊豆守様御家來中ニ御相談本堂普請可致旨戒善院慶雲ニ相談之上 上人儀は信州江罷歸り候 依之戒善院斗回國いたし候、供ニハ弟子斗三寺中之内一人も附添不申後ニ衆徒小僧之四人供致し候、巳年(元祿一四年)上總之勸化、同暮御印文信州迄御歸り、翌午年三月下旬ニ御印文千駄木保福寺迄戒善院代理乗院、上人代青蓮院兩僧供奉致戒善院迄相渡候、云云

とある。大本願上人は慶安<sup>1648</sup>年江戸谷中に兼帶所を將軍家より賜い(元祿十六<sup>1703</sup>年青山の現在地に移轉)漸次將軍家大奥との交渉が繁くなり、三年に一度は「御禮年」と稱し將軍家拜謁の事などあつて、信州本寺と青山善光寺とに交互に住されたが道中の失費が大きいという經濟的理由もあつて江戸在住の期間が數年以上の長期にわたる事もあつた。故に回國開帳の場合上人は女性であるから回國せず在府であれば「信州江罷歸」つて松代藩の眞田伊豆守家中と相談の上本堂普請の事に當るといふ表現がある譯である。

この時の回國同行者數は右の文書に三寺中からは一人も出ず「供ニハ弟子斗」「後ニ衆徒小僧三四人供致し候」とある如く極く小數であつた。尤もこの他に寺役人や雜用を勧める仲間、更に開帳佛、御印文をはじめ携行する荷類のための人足も必要であるが「巡行用記」の記録では戒善院の他に

第三表 回 國 人 數

	第一回 元禄寶永度	第二回 延 享 度	第四回 寛 政 度
院 家 出 家	戒 善 院 7 人	靈 山 院 寺中弟子5人, 本坊弟子1人 福生院遷居	清淨林院 衆徒中より8人 出家 4人
寺役人	家老 2人 侍 4人	〃 3人 〃 4人 近 習 2人	2人 1人 1人 勘定方 2人
仲 間	7人	宰領 6人	先供 2人 その他諸役
上下べ	21人	23人	66人
人 馬 (但し出の 發時の 員數)		人足 70人程 馬 15疋程	人足 100人 (馬のない所では人足 240人余を要す) 馬 18疋

出家 七人、家老 二人、侍 四人、中間 七人  
で「上下べ二十一人」と見え、僧侶のみの人数について  
見ても江戸開帳の場合

元禄十人、安永度二十人、享和度十八人、文政度十五  
人

が出てゐるに對し半数以下である。但し最初は何事も  
質素に小規模に行われた回國開帳も回を重ねるごとに  
大規模に形をととのえて行くのであつて、第一回と第  
二・四回（第三回は記録を欠く）との人数を對比する  
と第三表に見る如き相違がある。

（第三表）

回國順路や各宿驛での休憩宿泊人馬繼立てなどの日  
程の概略は公儀えの出願と同じ頃から豫定し、公儀よ  
りの手配を早期に依頼してあるが、なお正確には順次  
開帳の道中を續けつつ時の情勢に合わせて追々に「僧  
侶役人打寄示談の上致治定」して行く。即ち開帳の繁  
昌不繁昌によつて當初の豫定より一兩日ていど各地で



の開帳期間を延長或いは短縮する事もあり、院家をはじめ同行者の健康や交通事情によつても（殊に雨期、積雪期の山路や河海の渡船場では）しばしば豫定を變更せねばならなかつた。然し原則的には五日間以上の開帳、或いは前日の行程の遠かつた所では着後一日休息や支度のために費し開帳後にも一日休んでから出發するが、短時日の場合は殆んど休みなく開帳と移動とをくり返している。僧侶及び寺役人は各々受持ちの役儀を定め當番と非番にわけて如來寶龕につき従い、開帳場の法務事務に擔わるものと、一行より先行して宿泊や食事・人馬の手配を行い開帳場の檢分支度をしておくものとに分つてあつた。寛政度の記録であるが〔回國順路記〕には

一、開帳場爲知札一日も早く爲立候程宜敷候間六七日十日程宛茂（も）前々日限相定先觸遣可然事

一、僧中江先日申渡候書付之趣相守第一如來之御爲を存知出精可相勤候、途中ニ而當番三人は御龕付非番三人は御先へ罷越開帳場之仕度可致候事

一、中澤六右衛門、西條七兵衛、勘定方相勤（中略）途中ハ一人御龕付、一人は御先江罷越御宿寺之用向可調候事などの記述がある。

#### A、第一回回國と御印文頂戴の儀について

第一回の回國經路は資料の不備で前半の詳細が不明であるが元祿十四年九月から上總方面を回つて江戸保福寺に戻つて越年し、同十五年は關東各地から奥羽地方を回つたようである。再び保福寺で越年して同十六年は二月十日出發、品川、川崎、神奈川、藤澤、山下、沼目、小田原、三島、本市場、江尻、府中、藤枝、島田、掛川、見付、舞阪、新阪、新居、吉田、岡田、鳴海、名古屋、桑名、鳥羽、朝田、津と東海道筋を殆んど各宿ごとに一兩日乃至數日づつ開帳し漸次西に移り、伊賀から大和、攝津の國々でも開帳、河内國小山村の善光寺（信州よりの分身佛を

奉祀している。現在も大阪府南河内郡藤井寺町小山にあるに逗留、同十七年二月一日から七日まで同寺で勸化開帳を行つて九日出發、一たん大坂和光寺に入つてから瀬戸内海沿いに船陸兩路を併用して中國筋、九州、四國方面を一周している。この年以降は「元祿道中」に詳しいので圖面にあらわしてみたが、

（地圖後出）

當時の國郡名のまゝ見ると

中國筋||攝津、幡摩、備前、備中、備後、安藝、周防、長門の八ヶ國

九州||筑前、肥前、肥後、薩摩、大隅、日向、豊後の七ヶ國

四國||伊豫、讃岐、阿波の三ヶ國

計十八ヶ國五百七十五里に及ぶ廣範圍な出開帳であつた。この年改元があり十一月十五日大坂を経て京師に入り八坂庚申堂で越年、翌寶永二年まづ庚申堂で一ヶ月間（二月十五日～三月十五日）の勸化開帳を行い、北國筋山陰地方を巡回している。（七月以降記録を欠くが）丹波、但馬、播磨、美作、備後、出雲、伯耆、因幡、丹後、若狹の十一ヶ國二百四十七里の行程が明らかである。寶永三年は前年十月七日から逗留していた大津坂本の大覺寺で七日間（二月十一～十七日）の勸化開帳を行つた後二月十九日出興、若狹、越前、加賀、能登、越中、越後の六ヶ國百五十七里を経て八月十三日信州本寺に還座して居る。

回國範圍や開帳場所、日數等については一覽表を掲げておく。

（第四表）

第四表 回 國 範 圍 と 開 帳 場

		回 國 範 圍	開帳場 宿寺宗派別數 ○但シ着開帳のみの所は除く		開 帳 總日數	回 國 總日數
第 1 回 5 年 6 ヶ月	元祿14年 9 月 千駄木保福寺出立 15年 16年 〃 越年	奥羽・上總方面 關東・東海道筋 不 明	不 明			
	17年 河内善光寺越年(7日間開帳)	中國筋 152里 九州 276里 四國 147里	19ヶ所 25ヶ所 9ヶ所	天台 5 淨土12 眞言 2 淨土15 天台 2 眞言 3 禪 1 時宗 3 一向宗 1 淨土 6 眞言 3	62日 100日 49日	308日
	寶永 2 年 京都庚甲堂越年(30日間開帳)	五畿内 中國筋 247里	37ヶ所	淨土24 天台 2 禪 4 一向宗 4 時宗 2 日蓮 1	146日	234日
	〃 3 年 坂本大覺寺越年(7日間開帳) 〃 8月13日 善光寺飯山	北國筋 157里	24ヶ所	淨土12 天台 1 眞言 3 一向宗 8	129日	184日
第 2 回 1 年 6 ヶ月	延享 4 年 3 月13日 善光寺出立	北陸・奥羽 466里28丁	48ヶ所	淨土23 眞言 2 天台11 禪 3 淨土眞宗 4 時宗 2 在家(本陣その他) 4	172日	264日
	寛延 1 年 常陸府中東禪寺越年(15日 間縁起講釋 10日間開帳) 4月25日より6月29日まで田多藥 師(東江寺)逗留開帳 7月 8 日 同寺出立 9月23日 善光寺飯山	關東  相模甲州 204里 5丁	20ヶ所	淨土 9 天台 5 眞言 4 禪 1 在家 1	113日 (東江寺 開帳日數 は不加)	235日

第3回 2年 3ヶ月	安永9年3月16日 善光寺創立 京都盧山寺(開帳 30日間) 大坂天王寺(同上)	紀伊・東海道筋 關東 北陸	不明			
	天明1年 江戸東江寺越年 〃 2年6月27善光寺坂山	北陸		淨土11 眞言5 禪3 一向宗7 時宗1 在家4	99日	120日
	寛政6年8月3日 善光寺創立	北陸・近畿 209里	31ヶ所	淨土26 天台3 一向宗5 禪5 時宗3 日蓮1 在家1 不明2	160日	
	7年 越府中 引接寺越年 (15日間開帳)	山陰・山陽 303里餘	45ヶ所	淨土9 天台3 一向宗1 禪4 不明3 一向宗1 淨土8 天台3 一向宗1 禪2 不明4	100日 86日	380日 (閏月あ る故)
第4回 3年 10ヶ月	8年 伏見龍雲寺越年 (開帳)	中國筋 約500里 九州	23ヶ所 18ヶ所	淨土9 天台6 一向宗1 眞言4 不明3 一向宗1 淨土8 天台3 一向宗1 禪2 不明4	100日 86日	380日 (閏月あ る故)
	9年 小倉峯高寺越年 10月10日 大坂 著	九州 四國 約320里 近畿	21ヶ所 16ヶ所 3ヶ所	淨土8 眞言3 一向宗1 禪1 時宗3 不明4 淨土6 眞言6 日蓮1 禪2 不明1 淨土2 天台1	90日 65日 15日	250日
	10年 大坂深江法妙寺越年 2月20日より伏見龍雲寺開帳 6月22日 善光寺坂山					

回國が幾年かに涉たり道中に於いて年末にさしかかると、三都或いはそれに準ずる程の都會地の何れか最寄の地に入り、有縁の寺院をかりて一同逗留する。これは何地においても僧俗共に多忙な年末年始には勸化の實が上らな

つた事と、一つには古來より繼承して來た善光寺本堂の越年行事において回國に携行している「御印文」が不可欠のもので、如來の越年（十二月の中の申の日）までに是非とも本寺へ持ち歸つておく必要があつた爲である。

善光寺一山のうち殊に中衆十四坊（徳川中期までは十五坊）の住職が中心となつて執行する越年の式は今もなお行われている、古神道的性格を含んだ特異な秘儀で昭和三十六年には長野縣文化財に指定せられた。<sup>註17</sup> 彼らは年蒭順に役儀を廻りもちし、當役（その年の中心役となるもの）、後住（來年當役をつとめる豫定の者）、又後住（<sup>またしう</sup>來々年の豫定者）の三人を主とし、他の十一坊もこれに協力しすべて持戒清淨に別火精進して金堂に參籠し注連張り、煤拂、釜祈禱、御松はやし、もちつき、修正會等年末年始にかけての禊齊祈禱祝儀に關する種々の行儀を執行する。嚴密には當役の僧個人を「堂童子」と言うが、場合によつてはこの一聯の行事そのものを廣く堂童子の儀式と呼びならわしている。

「御印文」はこの堂童子の儀式のうちで最も重要なものであつて、善光寺如來尊像を鑄造した時の閻浮檀金で、三尊の各殘金から彫製したとの傳承ある三顆の印である。常に金欄の布で包み筐中に收めてあるが年末には新しい布に包みかえる。この眞印は捺押しないが、別にそれを模刻したといわれる木製の三印があり、本師如來寶印・本師如來牛玉・本師如來決定の印文を刻してある。七草の法要にはこれを杉原紙に捺印し牛玉杖の先端につけて堂童子が本尊三鉢（彌陀・觀音・勢至の一光三尊像）三卿のうち二鉢善光・彌生前）及び本堂内陣の六方（東南北天地）の各々に三度宛捺す形をしてまわる。これには禊齊並びに養蚕五穀等の豊穰を祈る意味があつて、明治初期まではこの時の御印文を挟んだ牛玉杖を農家がうけて歸り田畑に立てて虫除とする古來からの風習が残つていた。而してこの法要終了後（十五日朝「東門開き」の行儀にも用いその夜筐中に納める）十五日までの一七日間堂童子は眞印を預つて參詣の諸人の頭上に捺押の形をする。これを「御印文頂戴」と言い殊に近郷近在から當歳の乳兒を「頂か

せ」に連れて来る信徒が多い。出開帳は信州本寺に参詣し得ぬ老幼女性等への結縁を目的とするものであるから前立本尊と共に「御印文」眞印を携へて遠國の人々にも親しく「頂戴」させ、或いは年末に解いた前年度の包布を細分して護符袋に縫製し「御印文切守」と稱して篤志者等に授與している。なお元祿七年大坂開帳の折四天王寺で貧賤の人々に「御印文寫し」を頒布したとあるのは木製模印の捺押紙であつたろう。

先の願書文面にも見た如く御印文は大本願上人の代理として中衆の藤僧、大勸進別當代理として衆徒の藤僧が各一つづつ扨從して坂山し堂童子の行事が終り次第直ちに一同の逗留している越年宿寺に運んで別當に渡しその年の回國に再び携行する事いつの場合も同様である。なお先掲元祿一四年五月の願書の中に「上人代青蓮院」とあるのは寶永七<sup>1710</sup>年明治元<sup>1868</sup>年の間東叡山の壓力により中衆十四坊がすべて天台宗に屬せしめられ、坊號を院號に改稱した時代がある。青蓮院とは白蓮坊の事であつて古來からの因縁により天台宗となるもやはり大本願の末として上人の代理をつとめているのである。又御印文の往復には道中盜難等を警戒したと見え〔回國順路記〕には御切文販國之節ハ小長持ニ而隨分手輕人ニ相成候、重く候てハ万一金子と目懸候儀も可有候ゆへなりとの注意がなされている。

一方御印文のない間の一同は宿寺に逗留して長旅の疲れを休めつつ、宿寺等から希望があれば年内にも數日前後の短期の開帳や縁起講談を行い、新年には「善光寺本堂修正會の通り」に元旦から七草までの一七日間朝開帳と日中日没の三座づつ計二十一座の法要を行う。寺役人は次年度の順路計畫をねり、豫定地諸藩の寺社役や宿驛役人に開帳場や道中人馬繼立の手配を依頼し、早くも次の越年宿寺と交渉して三都のうちの何れかに逗留豫定があれば東叡山や公儀へ願書を出し、大本願にも役僧役人の立合いを連絡するなど種々の準備にかかつていた。

又越年逗留期間を利用してその地近邊に特請があれば隨時奉持して一日程度の開帳を行つてゐる。例えば元祿十四年末には、

保福寺逗留中ニ甲府御屋敷その他方へ本尊入開帳奉加〔三都開扉〕

寛政九年末には大坂深江法妙寺を越年の基地としながらも禁裡からの招待があつたので一應京都伏見龍雲寺（現在伏見善光寺と稱す）に入りそこから参内した記録が〔奥日記〕に見えている。これは和光寺よりの連絡書狀の寫しであるが

。（寛政九年十一月十七日）順（巡）國先ニおいて如來参内院家供奉被 仰付先例ニ無之善光御三方共ニ参内被 仰付難有仕合奉存候 云云

。（寛政十年二月十二日）一、信州如來様去霜月

十七日禁裡江 御参内 黃金一枚

同十九日仙洞様江 入興 銀三枚

同廿一日青蓮院宮様江 入興 銀二枚

右之通御備物有之候由其後伏見桃山ニ御逗留 極月之十日深江へ御皈寺御座候 云云

信州から御印文が到着すると殆んどの場合越年逗留の宿寺で七日乃至三十日間程度の勸化開帳を行つて後回國に出發する。それがもし三都のうちのいづれかの地であるならば、大勸進が單獨で行つてゐる回國開帳中であつて必もらず大本願に連絡し、本願系の役僧役人の立合いを求め、その連絡を遅延或いは怠つた場合には大本願側からきびしく追及している。これは恐らく經濟問題がからんでいる爲で、元祿五年の江戸開帳中に勘定方をはじめ不正を働き私腹をこやした僧俗があつて収入の三分の一を横領されたと云われている。開帳終了後も一向收支決算を報告し

ないという亂脈ぶりから大本願では殊にその後の三都開帳を注意していたのであろう。例えば「三都開扉」元祿五年及び七年の勘定方について

一、法印を始衆僧も始而之事江戸之様子無心元見人聞人を頼み此度之開帳可然様ニはやるやうニ御取持頼入候として頼ければ（中略）善光寺の事なればき／＼の衆取持ニ被出百餘人あり、其中に前々俗人五六人道心五六人本々のふりをしてれき／＼衆の信心をさまし（中略）錢をうればぢきにぬきしさしほうにぬきし金銀のはかりにぬきし入札の者と奉行と内々を組不知人のようにもてなし、賣物茶屋小屋きも入するふりをして其下ハ皆々くみにてぬすみ三ヶ一ハぬすまれ候 云云

一、開帳中毎日帳かうせて（失て）ハ又新くとぢけり、ぬすみハ不及筆ニ其時衆僧いい合せてさてもにくき取持かな（中略）このぬすみあらためたまへと皆々威徳院へ申 心を合懷中硯して毎日場所／＼の帳のしめどもを寫暮に歸り手前之帳江寫しける。されハこそしまいに惣高公儀江書上げる六千五十兩として江戸取持不殘京取持越後屋八兵衛鼠屋十郎左衛門加判して上けり、其時最勝王寺衆僧のひかえ帳をかりて是にて吟味されけれハ七千三百八十兩見えけり。時に最勝王寺此殘金ハ何とて候や但し勘定ちがい候哉皆々の首ハ切とも打ともすき也とせめられ泪を流し閉口、誠に毎日手ニ付足ニ付ぬすむさえ大目ニ見候ニ是ハ夥しき事かなと有けれハ茂兵が言別ニ、江戸の奉加所ハ本願をさせん爲且那衆大勸進江之寄進と偽り立候へとも、江戸の普請ハ千貳百拾兩入申候それをうめんため皆々申合て仕候 全くぬすみにてハ無之、本願をさくるはぬすみにあらずや何ともいわは言公儀江可申上と申候へハ、みな／＼手をすり證文して訴訟しけれハ最勝王寺もけに／＼言上ハ皆々ころされへし然ハ不宜とおんみつに被成候



又享保年中「開帳支度立合之件御裁許ニ付迷惑の次第を認上々様江御内見に入候書付」の寫し（大本願藏）の中に（前略）造營入用金勘定之義有之譯ハ先年江戶京都大坂三ヶ所開帳金無埒ニ付元祿十三年辰年眞田伊豆守殿御吟味ニ而相濟し候へ共滯、六年以前ニモ御奉行所御苦勞ニ被成候、其上大勸進諸國勸化金一切勘定相立不申候ニ付、此段申立候處、其件ハ無沙汰兩寺各急度勘定可相立由被仰付候、去年中開帳願之節茂開帳中納候勸化物入念候様ニ役人共江可申付旨兩寺江被仰付被下候様ニと奉願候茂皆以勘定無埒仕候故無勿體奉存候故相願申候とある。これは前にも大本願側から收支を明瞭にするよう申付てほしいと願出たのに對し公儀は大勸進に有利な裁決を下したので追訴している文書であり、爾來回國開帳と雖も大勸進から願書提出に署名の交渉ある毎に大本願ではまづ勸化のためか「結縁」のためか問ひ合わせ慎重を期するようになった。

寶永四年金堂完成の後三十餘年を経て善光寺では本堂修理や仁王門、鐘樓堂、經藏等建立の必要があつて再び各地に出開帳を行う事となつた。元文五<sup>1740</sup>年六月一日から二ヶ月間江戶開帳を行つたがその間に

御當地開帳仕候所參詣致群集勸化物も相應ニ打集候得共、存候程ニは無御座候、其上遠國之儀道中並支度萬端物入多相殘候、勸化物ニ而は大堂と申殊更及大破修復成就難仕、難儀至極ニ奉存候、依之來酉年於京都大坂六十日宛開帳仕本堂修復成就仕度奉願上候

元文五申年七月

善光寺寺中 惣代 福生院

善光寺 大本願

同 大勸進

寺社御奉行所

との願書〔如來三都回國〕を出し許されて、翌寛保元年には三月二十一日と五月二十七日京都大佛養源院で、同六月一日と八月一日大坂天王寺でそれと開帳している。京大坂兩所での開帳に關しては江戸の寺社奉行の他に南都御番所（奈良奉行）、妙法院宮御坊官中、大坂御番所、大坂御城代などに届出が必要であり開閉帳の期日、境内小屋掛はずし、散錢の出納等克明に届出ている。例えば長野縣立圖書館藏の今井家文書中の書簡類に次の如きがある。

。 覺

一、錢 拾六貫四百文

右者當廿五日信州善光寺本尊網島大長寺より天王寺講堂江入佛仕候節路次散物ニ而御座候處開帳支度調物爲代銀右之錢不殘松尾町松嶋屋兵衛門と申者方江相渡申候 右御届申上候 以上

信州善光寺大勸進役人 今井磯右衛門 印

寛保元年西五月晦日

御奉行所

。 覺

六月朔日より八月二日迄

一、錢 五千六百拾九貫三百七拾貳文

諸勸化所散錢高

錢貳百貳拾貳貫四百拾六文

天王寺大工並日雇方江 開帳中相拂申候

錢五百拾八貫貳百拾四文

大坂松尾町松嶋屋兵右衛門方江 開帳中諸入用ニ相拂申候

第五表 元文・寛保度三都開帳勸化金出納

善光寺の回國開帳

入			出	
	金 銀 錢	細 目	金 錢	細 目
江戸にて	金 11,158兩2歩 錢 819文	60日間、回向院にての惣勸化高 (うち金 170兩3歩) (は日月牌料)	金 15兩1歩 錢 45文	世尊院へ渡す
	金 2兩2歩 錢 202文	開帳後古道具拂代回向院より	金 1兩1歩 錢 69文	棟梁へ檜木しろ代として渡す
	金 42兩2歩 銀 1貫290匁 (但シ30枚分) 銀 150匁 (但シ包銀50分也)	特別信施	金 6兩2歩 錢 601文	大工木挽扶持方 廻9俵4斗7升代
	金 19兩 錢 1貫726文 金 10兩 金 6兩3歩 金 10兩	塔婆寄進料 御戸帳料 善佐公御厨子料 西山素洗より	金 1兩3歩 錢 272文	傾安へ渡す
			金 1歩 錢 624文	松本 塗師儀右衛門へ
京都にて	金 1,421兩1歩	65日間京都大佛にての惣勸化高 (うち金50兩1歩は) 日月牌料	金 2歩 錢 458文	横澤町 六助へ
	金 2兩2歩 銀 559匁(但シ13枚分) 錢 1貫文	参内の節御奉納	金 18兩 錢 36文	大工261人 木挽65人へ
	金 7兩2歩 (但シ判金1枚分) 金 3兩2歩	西本願寺へ本尊御入の節奉納	金 7兩 錢 292文	棟梁へ材木板代として
			金 5兩4歩 錢 789文	仕立屋へ
			金 3兩2歩 錢 612文	板行屋へ
大坂にて	金 2,065兩 錢 141文	60日間天王寺にての惣勸化高 (うち金55兩1歩 銀 1貫920匁 此金32兩也 日月牌料)	金 9兩2歩 錢 235文	綿屋へ
	金 6兩3歩 錢 1貫451文 金 7兩	道具屋茂兵衛より 山家屋藤七より 桔梗屋治兵衛より	金 7兩 錢 578文	塗師へ
	錢 1貫736文	大坂にて衣類その他納物拂代	金 3歩	小工へ
	金 773兩 錢 513文	特別信施	金 1兩 錢 184文	大門町又治郎へ
			以下省 畧	

錢四千八百七拾八貫六百五拾八文

大坂日本橋北江貳丁目油町貳丁目 錢屋小四郎方江相拂申候

三口合錢五千六百拾九貫三百七拾貳文

右之通出入相違無御座候、尤他所他國江差遣不申候、大坂ニ而通用仕候、

右御届申上候 以上

信州善光寺大勸進役人

今井 磯 右衛門

同 役者

放 光 院

酉八月五日

御 奉 行 所

なおこの時の三都での勸化高は他に類例がない程明確に記録された〔勸化物帳〕が現存するので表示しておく。

(第五表)

大坂閉帳の後一行は東海道を下り沼目(神奈川縣山中郡)三福寺や拜島普

明寺大日堂などで小規模な開帳をしつつ信州本寺へ如來を飯座した。

計	金 16,133兩2步 (兩替銀60匁・錢 3 貫400文)	計	金 3,038兩3步 (兩替銀58兩5分・錢3貫400文)
	銀 1 貫990匁 此金33兩 1 步・錢224文		銀 2 貫214匁 9 分 7 厘, 此金38兩・錢111文
	錢 7 貫790文 此金 2 兩・錢990文		錢 85貫929文 此金25兩 1 步, 錢77文
	都合 金 16,170兩 3 步 錢 1 貫218文		金 3,102兩 錢 188文
			三ヶ所拂方都合 金 6,356兩 2 步 錢 451文
			差引殘高 金 9814兩 1 步 錢 763文

當時の社會狀勢を見るとすでに徳川前期の文化爛熟期の弊があらわれ幕府諸藩の經濟は不況に墜ちていた。八代吉宗は勤儉尙武の風をすすめ所謂享保の改革を行つて財政の建なおしを志したが、都市商工業の發展を基礎とする時流には抗し得ず却つて諸候の不滿をよび、或いは藩の專賣制度の壓迫や貢租の誅求のため悲慘な境遇におかれた農民層の反抗がおこるなど改革の實績は餘り上らなかつた。佛教に對して吉宗は特に排斥する程ではなく有能な僧には個人的に親近したが、佛教そのものを格別尊信する事はなくいわば冷淡な態度で接し、寺院や僧侶への處遇を從來に比して漸次薄くして行つたようである。例えば享保七壬寅年「諸寺院江被<sup>ニ</sup>仰出<sup>一</sup>候控書」中にも<sup>註18</sup>

一、堂社建立修復之爲に千部並談義興行之節勸化いたし候ニ付參詣之ものに興行之旨趣申聞候義ハ尤ニ候、善事修行之法席にて勸化札を出し、或は供養と號して袋を配り、灯明料を取集候次第、見苦敷致し方及聞候ニ付自分ハ施主之志ニ任せ、鄙勞なる勤方相止、禪門之俗人を座へ出し候様成義仕間敷事

とあり、その他從來徳川氏と何らかの緣故を申立てて江戸大奥に祈禱札を獻ずる諸社寺が多かつたのを漸次停止せしめ、五山の僧侶が出世倫<sup>旨</sup>頂戴の後御禮銀を獻上していた事についても、貧學の僧も出世出来るようにとの理由でこれを禁止するなど種々の制約がなされた。行動の範圍をせばめられた僧侶は自づから無氣力となり、すべてが形式的に墮して行つたようである。しかも諸寺の開帳の激増は秘佛に對する庶民の感動を次第に稀薄にし「嬉遊笑覽卷七」には

江戸にて開帳あるに何時にても參詣群集するは善光寺の彌陀と清涼寺の釋迦佛また成田の不動などなり

とはあるも、元祿度江戸開帳の繁昌ぶりに比してこの時の三都開帳では豫想に反して收益が上らず、更に廣範圍な回國勸化を必要としていた。

## B、第二回回國開帳

大本願の資料〔奥日記〕によると延享三年四月十六日出府中の大勸進（宿舎上野常性院）から青山善光寺在住の大本願上人方へ連絡があり

信州如來堂御修覆致出來三門建立企候得共是迄は七年以前開帳の散物を以成就致候 然所善光寺ニ仁王ハ有之候得共仁王門無之候故本堂ニ差置候、扱又元祿年中大坂表にて經藏勸化致金二百五十兩ほと有之一切經と本尊は致出來候得共經堂末無之候、且又鐘堂無之只今四ツ柱にて釣置候、此三品建立之手あて無之候間、右建立のため出羽奥州回國開帳致度旨、此度御奉行所へ奉願度候間上人ニも御同心被成候様ニ申上候 云云

との事で、大本願側からそれが單なる「開帳」であるか又は「勸化」であるのかにつき問合わせた所、四月二十一日に到り

（前略）巡行勸化と申にて御座候、尤寶永年中回國巡行被致候通にて此度ハ國數之少物ニ而御座候の返答があつたので、同二十八日了承して早速寺社奉行へ願書を提出し、五月二十一日奉行所大岡越前守より許可を得た。

翌延享四年一月十五日回國開帳の豫定を「爲知札」に記して二天門に建て廣く一般に公表した。同三月八日即ち第二回回國出興の直前大勸進からの書狀を見ると〔奥日記〕

此度之義ハ道中筋相願候所ニ而五三日つも致開帳候迄の儀ニ御座候、建札に江戸表逗留と相認候儀は北國雪國ニ御座候間何卒江府ニ而致越年夫より甲州江掛り致飯院度存よりニ御座候、毎度善敷御相談可仕筋ニ候得共願書急ぎ差上候故之儀 云云

と回國豫定の詳細が事後承諾の形になつた事を記びて來ている。この書狀では江戸逗留は越年の爲とのみ言つてゐるが實際には越年の他にも延享五年四月二十五日から七月七日迄江戸本所の東江寺に滞在し約二ヶ月間もの勸化開帳を行つてゐる。「如來三都回國」には

相願候ものえは參詣次第日々本尊拜爲仕候

とあり、同じ頃（寛延元年五月四日）大勸進より上人宛の書簡には

私義も先月中頃出府可仕と存候處千住において日延相願候ニ付、廿五日江戸表江罷出申候、宿坊之儀は本庄只ノ藥師と申處ニ御座候間其段寺社奉行所迄御届申上候、乍然開帳と申儀ニは無御座建札等も致し不申候右之段宜敷と申上候

と非公式な開帳であるから大本願側の「立合い」をさせない旨の言い譯けをしている。

出興は最初延享四年三月十一日の豫定であつたが「末た北國は雪深く馬足立かね」るため二日遅らせて同十三日明六ツ出立され、大本願からは上人は駒返橋迄、寺役人吉村富右衛門柄澤孝左衛門の兩人は町はずれまで奉送してゐる。

北國街道から越後路へ入り柏崎、寺泊、新潟、新發田（當地が越後一番の御繁昌で城主からも奉納金十兩を上られてゐる）鶴ヶ岡等で勸化開帳しつつ津輕、南部、仙臺の各國を回つて本州の北端青森に至り（八月十～十二日開帳）、會津を経て十二月八日常陸の府中東耀寺に至つて越年する。御印文は一時信州へ持參するが希望によつて宿寺で正月元旦より十五日の晩まで威徳院が縁起の講釋を行い、御印文は同月二十七日に到着したので早速翌日から十日間（一月二十八日～二月八日）勸化開帳を行つて翌九日から第二年目回國に出立してゐる。

繪縁起講談は月蓋長者、如是姫の傳説、百濟聖明王の如來信仰、聖德太子と如來の因縁、本田善光一族の說話等

を内容としたもので、善光寺中衆の一淵ノ坊が別名縁起堂と呼ばれているのはその手法を歴代の住侶が傳承していた爲と考えられる。これは中世の聖達が行つた「唱導」の系譜をうけているのであらう。平易な物語りによつて勸善懲惡をとき、罪障懺悔をすすめ教化に盡すと共に、地獄極樂の相をといて後生安穩のための作善としてささやかな勞働力の提供や零細な喜捨を行わせたのであつて、「三都開扉」中には繪縁起講談並びに御印文頂戴の冥加金として一人百文つつ申し上げた事が記録されている。

第二年目は常陸、下總、武藏の各地を回つて四月二十五日から七月八日まで江戸本所田多藥師東江寺に逗留。相模、甲斐を経て甲州街道から信州に入り九月二十三日坂山。尤も最初は九月十六日着の豫定であつたが、途中漸次延引し十八日に千曲川の西岸稻荷山本陣に到り雨天満水の爲船留にあつて通行出來ず、二十三日漸く出立、小市通りで同日夕刻善光寺に還座された。この時には大本願上人も在寺であつたので門前まで出迎え、三寺中や兩寺役人達は威儀を正して後町ごまちやうから本堂まで供奉の行列に加つた。

出開帳の行われたあとには善光寺本堂で「供養の別時念佛」が行われるのが當時の慣例であつた。第一回の寶永度は記録の不備で知る由もないが、元文寛保の三都開帳の後に延享三年三月十五日より一ヶ月間行われて以來、何時の場合も執行されている。所謂「金堂開帳」であつて出開帳を行つた事に對する報告法要的意味合が見られる。第二回回國後のそれは寛延元年九月二十八日から十月五日迄で「如來三都廻國」には

御廻向念佛（中略）晝四ツ時より大鐘をうち申し候て三寺中本堂江相詰候、兩寺役人四人裏付上下（絆）ニ而相詰候、尤爲結縁ニ御印文出し申候

と見える。この一年六ヶ月の間に巡行された道程は計六百七十里三十三丁、宿寺八十六うち逗留は五十九ヶ寺、在



家三十一軒となつてゐる。（但し前掲第四表の開帳場の項と數値が異なるのは同表には着開帳のみにて逗留勸化しなかつた所は數に加えてない故である）

かくして大勸進一行が回國勸化してゐる間に國元の善光寺では願書にも標榜してゐた所の三門、仁王門經藏の建立を着々と進工した。三門は延享四<sup>1747</sup>年一月十九日建立地形豫定の繪圖面が出来、同二月十四日から普請始め、寛延三<sup>1750</sup>年四月八日に完成してゐる。經藏は寶曆五年より着工同九年三月十五日完成、仁王門は同八年完成してゐる。これら三者に要した費用は金一萬三千二百八十九兩と銀五匁九分九厘と〔見聞舊事記副抄〕等にある。この時の回國により得た勸化金で賄われたのであらう。但しこのうち三門と經藏は現存し昭和四十年重要文化財に指定されてゐるのであるが、仁王門は弘化の大震災で焼失し更に再建のものが明治二十四年大火で焼亡したので現在の門は大正七年建立のものである。

### C、第三回回國開帳の中絶

第二回回國の後三十年を経て安永七年六月一日から本所回向院で八十日間の江戸開帳が行われた。この時は梅雨期から俄に酷暑となつたもようである〔如來三都回國〕によれば最初六十日間の豫定であつたが

（前略）最初之間打續雨天ニ而此節暑氣難絶（耐えがたく）御座候故朝夕開帳之節群集致候迄ニ而晝之内ハ參詣も薄く御座候得バ修復等之助成ニも成兼至極難儀仕候依之來ル間七月三日より同廿二日迄日數廿日之間開帳日延仕度奉願候 云々

と願ひ出て二十日間の延期を許されたのである。然しなお充分な収益がなかつた爲翌八年六月頃から回國の計畫にかかつてゐる。〔奥日記〕安永八年六月十日の條に大勸進から

信州善光寺如來堂修復の事去年開帳中之散物ニ而引足不申候故 准后様(日光門主)思召ヲ以日本回國開帳被 仰付候尤 公儀江も准后様より被仰達候得ば早速相濟可申と存候、乍然此方よりも願書ハ差出し先例之通一分ニテ差出候間上人江此段可申由之

と申し越し、同年八月晦日には回國は大勸進が單獨で行う事を公儀へ願出て許されている。又その間に京大坂で各々三十日宛開帳を「兩寺役人並に寺中立合」で行うとの趣旨につき兩本坊(大本願役人岡澤良右衛門・大勸進役人三木頼母)及び寺中の連署を以つて届け出で、上野執當中の添簡を得て寺社奉行所へ願ひ出で九月六日に許された。同十月に掲示された爲知札の文面は〔奥日記〕に次の通りある。

當山如來日本回國開帳

御免ニ付來ル子(安永九年)二月御發興木曾路美濃路近江路通行 京大坂ニ而三十日宛開帳、五畿内紀州巡國東海道下向江戸越年 翌丑(天明元年)より關東諸國相廻其後東國西國九州四國巡行畢而本山御還座奉成者也

亥九月

諸勸化一切不出

この時の回國の目的については國家安全祈願、遠國の老女人等との結縁が主體で餘力があれば五重塔建立の爲にしたいとの事であつた。

如來は安永九<sup>1780</sup>年三月十六日發興され、大本願からは上人が出府中であるため役僧役人兩名が丹波嶋迄奉送している。大勸進一行は如來を奉持して約十日の行程で上洛するが、大本願側の立合人宗光寺(役僧)、柄澤右平(役人)をはじめ先番の僧四人(衆徒老僧德壽院・中衆の向佛坊、野村坊・妻戸の甚妙坊)は先着して二十五日大津で如

來を迎え、供奉の行列に加つて二條寺町の盧山寺に入つた。

ここで四月一日より一ヶ月間京都開帳を行い五月一日准后様御拜、二日如(女)院御所、三日新女院御所、四日所司代並町奉行所、六日仙洞御所へいづれも如來を動座して結縁した。爲に日程は順延し五月六日から大坂開帳の豫定であつたのが京都出興が七日となり、途中守口で一泊して九日漸く大坂天王寺に到着した。大坂開帳は五月十二日から一ヶ月間で六月十二日結願閉帳し、十九日に出立堺へ向つた。

立合いの任を終えた大本願の役僧役人は如來を堺まで奉送して二十一日舟で京に引返し直ちに皈國の途につき、七月四日信州本寺に歸山した。

第三回回國については大勸進資料が全くなく大本願〔奥日記〕中に散見する大勸進よりの書狀類の控えによつて概略を知るのみである爲堺以降の順路は不詳である。和泉・紀州畿内各地から東海道を下り江戸東江寺で越年し、安永十年(即ち天明元年)には關東諸國、天明二年は陸奥・出羽方面を経て越後の十日町に至つた所で別當靈鷲山院慈薫が發病、六月二十三日不幸旅路で急逝した。この件は〔別當傳略〕にも

二年壬寅六月在越後十日町來迎寺公偶感疾以廿三日寂 秘喪不發從者奉佛歸 七月十日發喪築塔于寺垣内 在職  
凡十五年 云々

とある。別當の逝去を内密にしたまま宿寺を去り、二組に分れて一は遺骸を信州に運び六月二十五日着寺直ちに埋葬し、他は如來を奉持して同月二十七日還座した。業半ばにして逝つた別當の心中の無念さいかばかりであつたらう。

回國中に死亡或いは罹病の爲皈國した從侶の例はこの他にもなお數人ある。交通の不便な時代にあつて開帳と移

第六表 天明寛政年間三堂修覆等の費用

年 月	御本堂修復金銭拂帳寫		三門御葺替金銭拂帳	經藏御葺替金銭拂帳
天明 1 年	金 9 兩 3 分	錢 1 匁 237 文		
2・1～7月	〃 121 兩 3 分	2 匁 721 文		
3・1～12	金 224 兩 1 分 2 朱	275 匁 692 文		
4・3～12	〃 24 兩 3 分	51 匁 458 文		
5・1～12	〃 93 兩 2 朱	355 匁 534 文		
6・1～12	〃 308 兩 1 分 2 朱	1,177 匁 856 文		
7・1～12	〃 167 兩 1 分	656 匁 334 文		
8・1～8	〃 259 兩 1 分	618 匁 916 文		9～12月 金 21 兩 1 分 錢 61 匁 635 文
寛政 1			5～12月 金 266 兩 2 分 錢 230 文	1～5月 金 44 兩 2 分 2 朱 錢 153 匁 804 文
〃 2・12	〃 2,244 兩 3 分 2 朱		1～5月 金 430 兩 3 分 錢 76 文	
計	〃 3,453 兩 2 分 (爲金 3,959 兩 3 分 2 朱・錢 631 文)		金 697 兩 1 分 錢 310 文	金 64 兩 3 分 2 朱 錢 215 匁 439 文
惣 〃	金 4,757 兩 1 分 錢 1 匁 456 文			

動の連續である強行軍の日程に加えて、不馴れな季候  
風土の僻地を行脚し、醫藥の未發達な状態とも相俟つ  
て、文字通り不惜身命の勸化巡行のきびしさ尊さを知  
るのである。殊にこの第三回では二年三ヶ月の短期間  
に、延享四年五月八日宰領大門町五兵衛が越後嶋見濱  
で死亡（此地に埋葬）。同年十月二十日福生院病氣と  
なり奥州斗ヶ川より戻る。同十一月九日得住院病氣に  
て常陸須賀川より新七藤介二人がつきそい歸山。とい  
う不祥事の連續であつた。

次いで大勸進に補せられた不輕行院等順によつて天  
明二年七月「廻國願之義願下げ」の届が寺社奉行に納  
められ勸化開帳は中止のやむなきに至つた。この時の  
奉加金高は不明であるが天明二年から寛政二年にかけ  
て本堂三門經藏の修覆に四千七百五十七兩餘を使つて  
いるのでそれを上回る収益があつたと考えられる。

（第六表）

#### D、第四回回國開帳と奉加金

前回出開帳中絶の後十二年を経た寛政六年大勸進等順を中心としてその續行が計畫された。寛政六年二月十六日大本願では回國開帳を行うについて諸役向へ願書提出のために大勸進が江戸表に出府するとの連絡をうけた。〔如來三都回國〕中に記録されているその書狀は非常な長文であるが要約すると次の通りである。この度回國を企てた理由は天明二年先住が回國先で遷化されたので、當住は別當に任命されるや直ちに回國先に出向いてその巡行を繼承し豫定を完了してから入院（晋山）するつもりでいられた。しかし寺務に不案内の事とてとにかくづ入院された。故にいつまでもその事業を中途に残しておいたのでは後々のさわりにもなろうからと内々で上野の法類方より御奉行所に聞き合はせた所、一應回國を成就しておいた方がよからうとの事で院家をお召しとなつた。このような次第であるから上人によりしく申上てほしい”との内容である。

この時の開帳目的は當然先の第三回の目的と同様であるが、「日本巡行先用雜記」（岸本文書）の寛政七年五月廿一日の條に宿寺の準備を依頼するに際し、同地方を回られた先例即ち第一回の場合と對比して今回の開帳の性格を明記した箇所があるので次に記しておこう。

寶永年中之巡行は本堂焼失ニ付爲建立被致巡國候故建立第一質素ニ人數も少勢ニ而相廻り候 此度巡國開帳は先格之通ニ候得共別當之志願ハ第一爲國家安全並遠國之極老女人等信州迄參詣難相成者江爲結縁被致巡行開帳候其上若多分之散物寄進等も有之候得は年來焼失之五重之塔再建之志願ニ候間隨分寺格も軽く同勢も省略致し候得共先年より人數も少々相増候 依之一宿併逗留開帳有之候御寺院小寺ニ而候ハハ先例ニ無之候とも相應ニ間取等有之候御寺院江御相談有之候様致度候 夫も無之場所等は本尊ハ御寺別當は俗家ニ而も宜敷 猶又御寺院無之村

方ハ本尊御宿も俗家ニ而宜敷候 且又道法（みちのり）の義は諸人信心ニ而拜禮之輩多途中ニ而御與手間取候故  
一日に五里六里之外通行難被致候間其御積りニ而休泊御世話頼入候 云々

又この回國中にも京大坂で越年及び開帳がある場合には

如來御巡國序（ついで）ニ於京都大坂御開帳有之候由（中略）巡國序ニても先例御立合の場所ニて御座候此段承  
知致度候 云々

との事でその都度連絡により大本願の役僧役人が出向している。全國を通覽して越年宿寺等で長期勸化開帳の行われたものを抽出すると第六表の如くである。

（第七表）

第七表 越年宿寺及び長期開帳

着 寺	出 立	江戸、千駄木、保福寺出興 同 上	所 屬	勸 化 開 帳 期 間
元祿14年 15. 16. 16.	元祿14年 9 月 〃 15 16. 2. 10 17. 2. 9	京都 八坂, 庚申堂 大坂 河内, 善光寺 京都 庚申堂 大坂 天鷲寺	天台宗 淨土宗 天台宗 天台宗	2月15日～3月15日 (30日間) 2. 1～2. 7 (7日間) 2. 15～3. 15 (30日間) 9. 15～10. 15 ( 〃 )
第一回 寶永1. 11. 15 2. 2. 10. 7 3. 8. 13	寶永2. 3. 2. 19	大坂 坂本, 大覺寺 信州 善光寺遷座	天台宗	2. 11～2. 17 (7日間)

第二回	延享4. 12. 8 寛延1. 9. 23	延享4. 3. 13 〃 5. 2. 9 寛延1. 7. 8	同上 府中(水戸)東耀國寺 江戸 多田薬師 東江寺 善光寺遷座	天台宗 〃	(1.1.~1.15(15日間縁起講釋)) (1.28~2.8(8日間開帳)) □□~6.29(約2ヶ月)
第三回	安永9. 5. 25 9. 5 9 天明2 3. 6. 27	安永9. 3. 16 9. 5. 7 10 天明3	〃 出興 京都 二條 盧山寺 大坂 天王寺 江戸 東江寺 不 明 信州 善光寺 遷座	天台宗 〃	4.1~4.30 (30日間) 5.12~6.12 (30日間)
第四回	寛政6. 12. 1 7. 8. 12. 8 9. 10. 10 10. 6. 22	寛政6. 8. 3 7. 2. 27 8. 3. 22 9. 3. 1 10. 2. 17	〃 出興 越前 府中 引接寺 京都 伏見 龍雲寺 小倉 肇高寺 大坂 深江 法妙寺 善光寺遷座	浄土宗 天台宗 浄土宗 融通念佛宗	2.11~25 (14日間) 28~□ 9.11.7~12.10 (禁裡等へ入・伏見龍雲寺より) 10.2.12~2.17(5日間・大坂開帳) 10.2.20~(伏見で開帳)

「立合い」は既述の如く奉加金の出納に關する監督の意味が大きいが、本來法要には上人も出仕せられるはずであつて、江戸開帳では上人出府中なら開閉關の法要に必ず仕出していられるのに、京大坂までは女性のため同行せられない爲その代理として法筵に出席するのが役僧の任務でもあつた。「巡行用記」などの京・大坂での結願の折には

いづれも左の如き記事が見られる。

ハツ時惣開帳宗光寺御代。拜相勸聽聞座出席柄澤右平善光前ニ 法事相濟閉帳各退出

宗光寺とは大本願の役僧・柄澤右平は同じく役人であつて開帳期間中各々法務寺務を分擔していたのである。

先の記録中にも見える如く回國中の行程は平均一日五〇六里程度（船の場合はこれ以上も可能）であつて次の開帳場まで餘り遠い場合は適當な所で宿泊しつつ進んでいる。宿泊も開帳も原則として寺院を借りるが、人數に對して手狭の場合は二ヶ所以上に分宿する事もありこれを「下宿」と言つてゐる。適當な寺院のない土地では在家を用いる事もあり本陣或いは庄屋等に逗留した例もしばゝある。道中にての心得が〔巡行用記〕に記してあるがこれは江戸開帳における「定」とほぼ同文でやや件數が少いものである。即ち

# 定

一、火之元之儀は別而大切之事ニ候間面々心をかけ晝夜無油斷可被申付事

一、參詣之諸人に對し疎略成挨拶等有之間舖候 尤群集之中ニは御歷々も可有之候間 失禮無之様可相愼事

一、開帳場所は勿論上下御道中御宿寺等において無益の雜談無作法の躰無之義相愼可事

一、開帳中他出堅無用ニ候尤無據用事有之候ハバ役僧江申達許容之上罷出歸候節は早速其届可有之候 夜中は用事

有之候共他出堅無用之事

一、散錢散物等は信施物之事ニ候間 雖一紙半錢と不可致疎略事

一、召仕之者共ニ至迄口論或ハ異隔ケ間敷儀など於有之輩は 不論是非早速信州江可差戻事

一、極暑之節ニ候得は病人も可有之候 其節ハ役僧役人江申達早速療治を加へ可申候 押而相勸候儀可爲無用事



右之條々僧俗並末々ニ到迄急度可相守 若於犯違之輩有之は依其品可令沙汰候 以上

この時の回國は寛政六<sup>1794</sup>年七月十九日に越後芝田（新發田）までの「大先觸」を出し、同二十五日人足八十五人と馬十七疋の先觸を出して、八月三日善光寺を出興している。「巡行用記」にある「人馬先觸ニ差添加候人馬割・控」によると當時回國に所持したものが判るので次に掲げておく。（なお◎印を附したものは延享度回國記録中にも見えるものである）

幟 ・ 一人

◎双盤 ・ 二人

◎散錢箱二・四人

◎常香常灯・二人

◎本尊御龕・六人

◎御印文御龕・四人

釋尊御龕・四人

寶物長持七棹・三十八人

兩掛四荷・四人

玉照院加籠・三人

◎奥長持六棹・三十二人（但し延享度は五棹）

竹馬 ・ 一人

合羽籠 ・ 二人

茶辨當 ・ 一人

乗掛拾駄・馬十疋・

駄荷七駄・馬七疋（延享度は乗掛九駄、駄荷多少とある）

とある。北國街道を飯山通りで北上し、前回中止になった越後の十日町時宗の來迎寺で三日間（八月九〜十一日）の勸化開帳を最初とし、加賀・越前の諸所を経て越前府中（武生）淨土宗の引接寺で越年及び初開帳（寛政七年二月十一〜二十五日）を行つてゐる。

七年は二月二十七日府中出興・若狹の小濱から裏日本側を本州の西端萩まで行き中國地方、即ち宮津・福知山・鳥取・米子・松江・湯津・萩・吉田・三次・松山・津山・幾野・笹山・郡山と一巡して京都伏見龍雲寺に入る。

八年は同處で越年後の初開帳を行つて三月二十二日出興、大坂から海陸兩路を交じえて明石・赤穂・岡山・矢掛・福山・岩國・長府と中國路を西下し、八月四日赤間から海上三里を経て小倉に渡る。九州では博多・唐津・長崎・嶋原・佐賀・隅本・久留米・秋月と北部を回國して十二月八日小倉の峯高寺に到る。

九年越年後（恐らく峯高寺で勸化開帳を行つたであろうが明確な資料はない）三月一日出興以降宇土・水股・出水・鹿兒島・都ノ城・佐土原・高鍋・歌枝・竹田・臼杵・佐伯に至り、七月二十日頃海上三十二里程を宇和島に渡る（伯し前回は臼杵から乗船）。此處の船便は城主よりの配慮によるもので〔回國順路記〕には

當所より四國江御移り 伊豫宇和嶋迄海上貳十貳里 勿論城下大手先ニ而御乗船御馳走 御船左之通

御關船 十四端帆 壹艘

供船 八反帆 三艘

傳馬船 壹艘

御出帆之日暫漕出し御船かかり、翌日未明より漕出し暮六ツ時宇和島より三里手前大浦と申ニかかり 翌日宇和

嶋之内かば島と申へ御船参り候時 宇和島より御迎船出候

即ち三日間の船旅であつた。四國は大洲・松山・今治・丸亀から一時（八月下旬）本州に渡つて倉敷・笠岡等で勸化し再び四國の高松・徳島と巡行して淡路島須本を経て播州明石から兵庫・尼ヶ崎・大坂深江法妙寺へ入つてゐる（前回は徳島から大坂まで船で直行であつた）。前の元祿十七年の場合は九州四國を一ケ年で回國したので一ヶ所における開帳期間も極く短かつたが、今回は各所での逗留日數をやや延し二ケ年をかけて九州四國を回國している。なお具體的には地圖及び前掲第四表に記入してある。

#### （地圖A）

この年十月十日に一たん法妙寺へ着いた一行は間もなく京都に出て伏見龍雲を宿寺とし十一月十七日禁裡参内（黄金一枚如來前に備へらる）、同十九日仙洞御所（銀三枚御そなえ）、同二十一日青蓮院門跡（銀三枚御そなえ）での各拜禮の事があつて十二月十日再び深江に歸着して越年した。なおこの時大勸進は金百拾兩を青蓮院坊官以下一統に獻じてはじめて紫衣勅許並びに法親王御召古網代輿の下賜を得たのである。<sup>註20</sup>  
十年二月十二日より五日間同寺で開帳、十七日に出興、二十日より（期間不明「しばらく」とのみある）京都龍雲寺開帳を行つてゐる。その後の経路は不明であるが大津で勸化のあつた事は明らかであるから、近江路・美濃路・木曾路と開帳

を重ねつつ信州に戻ったと思われる。本寺還座は六月二十二日で〔奥日記〕には

御参内の節之通之御烈（行列）にて御着之由 宗光寺丹波島迄御出迎に罷出 彦太夫富右衛門中ノ御所迄罷出候とあり、無事到着されたので〔同〕七月十七日には大本願より御祝儀として「先例の通り昆布杉原紙五帖」を大勧進方へ贈呈している。なお回國後の金堂開帳は「念佛堂御回向も年數延居り候ニ付序ニ有之候」との事で四萬五千日回向をかねて翌寛政十一<sup>1799</sup>年三月一日より四月三十日迄行われて出開帳に關する一聯の法務を完了した。

斯様に長期間廣域を勸化したにも拘わらず勸化高は不明であり而も回國の目標として願書にも表明してあつた五重塔の建立の件は、寛政十年十月十九日〔奥日記〕書狀に

五重之塔之儀此度上野より被仰出早々取懸り候様被 仰付候由にて東門町寛慶寺裏通にて地面極り三十間四方之地處之由 云々

とあるにも拘わらずいつか立消えとなり現在に至つてゐる。

當時の爲政者十一代家齊の治世の後半は元祿時代と並稱せられる文化文政の消費文化爛熟の期を現出するのであるが、すでに寛政の頃からその前驅症狀が現われて居り、豪奢な風俗の反面には幕閣の裏面に汚職收賄が半ば公然と行われ、權力者の誅求に對する一般庶民の批難やうらみの聲が大きくなりつつある等さまざまの弊害が生じていた。いわゆる「寛政の改革」が老中松平定信らによつて行われたが褪癢的世相や經濟の不況を立て直すには至らなかつた。農民層に對する一種の懷柔策として孝子・貞節・忠義・潔白・農業出精者などを選んで褒賞を與え、それを世の鑑と言立て抑壓された彼らを更に儒教道德で拘束すべく官撰せられた「官刻孝義錄」五〇卷（寛政元<sup>1789</sup>年）や、

各藩から公刊せられた善行者の記録（文化四<sup>1808</sup>年）は、忍従を美德として教えこまれた被支配階級者達の悲惨な生活を実に語っている。信州では松本藩の松本孝子傳・上田藩の「上田封内孝民傳」・高島藩の「爲仁録」などあるが、これはひとり信州のみにとどまらず全國的にみられる農山漁民層の實態であつたろう。貧困・病氣・家庭不和等の不遇な環境にあえぐ人々の多かつたであらう僻遠の地方にまで勸化開帳し、一枚半紙の喜捨による如來との結縁をとぎ、來世往生の契約たる御印文の頂戴、血脈授與等を行つた出開帳の行爲は時には採算を度外視した捨身の行願であつたかもしれない。善光寺の存在はこれにより全國的に知られ、一光三尊の如來信仰が廣く深く社會の底邊に生きる人々にまでも浸透して行つたはずである。

この時五重塔は建立に到らなかつたが大勸進ではその淨財を以て寛政八年大勸進本坊内に萬善堂を、同九年護摩堂及び内佛殿、同十一年聖天堂や數棟の倉庫小宇等を建造した。〔別當傳略〕等順の項には次の如くある。

寛政八年丙辰建萬善堂 九年丁巳建護摩堂及内佛殿新殿 十一己未建聖天堂其餘五六倉庫二三小宇新造焉 萬善堂以下盡在本坊垣内 以別當所得淨財充其費用 若巡國所得淨資備建塔費用 以付後紹職者 云々  
その得た所の淨財總額は不明であるが、長期の巡行であるためある程度たまると追々使者に托して本寺に持ち歸らしめたようで寛政度現存の資料中からは

。寛政七年六月二十一日銀山から金六一〇兩を善光寺へ、別に金五〇兩を當年末より逗留豫定の京都龍雲寺へ「越年の支度料として遣す」と計六六〇兩をもたせて居る。

。寛政七年八月十二日廣島から金二七〇〇兩を善光寺へ入金、使者の路用として金三五兩他に諸支拂のため金八〇兩計二八一五兩をもたせた。

場所柄にもよるであらうが短日時の間に相當多額の奉加金を收納した事が知られる。このような金錢の輸送方法については〔延享道中〕の中に（延享四年五月二十日新發田から六百兩餘を大勸進役人今井磯右衛門がもち歸り善光寺に無事納めた時の記錄）次の如くあり、

御前より御内用趣御院代江委細得御意　此度新發田より遣候勸化金渡申候

金六百兩　封金之

外ニ金二十兩　錢二貫文

右之通放光院井上佐兵衛御兩人へ相渡　則御兩人より受取印形書付受取申候

この度の金子何程という事一切沙汰申まじき旨申談　外二十兩と二貫文は此方よりの持出ニ付勘定に入組む由。

右の金子は三百兩つつ箱に入乗下ニいたし詰合にせんまいして持來候

と嚴重に運ばれ、金額も内密にしてあつた事が知られる。

勸化の内容は日月牌、御膳料、御印文御血脈お授け冥加金、守り札等の領布その他種々あるが米薪等の物納も各種ある。中でも米は佛餉袋を前以つて配つておき宿寺ごとに取まとめ獻備されたようである。〔巡行用記〕寛政七年七月二十一日萩にての記錄には

一、町年寄へ佛餉之儀尋候所最初内記様へ御越之節宿寺へ佛餉之儀被仰下候ニ付則宿寺より御役所へ右佛餉袋御拵被下候様被願候　依之會所ニ而も外ニ左様之義候ハバと袋之寸法書面等私共より御尋申上候様被仰付板木の用意も出來候所家老當職よりの差留宿寺勝手次第取調可指出旨被仰渡候段申聞候　右ニ付咄候ハ全以左様の譯ニハ必竟開帳回向ハ佛餉添物故申談候事且は少分ニ而も被致供養候得ば施主も現當利益ニ相成事ニ付此方名前ニ而宿寺

より差出客次第如來前へ相備候而御寺へ差置候例ニ候而宿寺の心得次第の事ニ而御役所向へ拘り候義ニハ無之候  
(上巻)

第 八 表

年月日	納	入	施	主	名	目	備	考
寛政6.9.1	白銀 金	2 枚 200疋	村松御城主ヨリ		如來前へ 別當へ			
〃 9.5	白銀	2 枚	芝田御城主ヨリ		如來前へ			
〃 11.28	金	300疋 200疋	越前御城主ヨリ		如來前へ 別當へ			
寛正7.2.29	白米 薪	5 俵 100束	敦賀御役所ヨリ		塔勸化に		賣拂代金を勘定方に入れる 薪は宿寺に連上	
〃 3.7	白米 瓦木	5 俵 100束	小濱・酒井修理太夫様ヨリ		如來へ御備		賣拂い代金を塔勸化に入れる 瓦木は宿寺へ	
〃 4.1	野菜一合 白米 1俵 味噌 1桶 薪 20束	5 種	宮津朽木腰岐守役人共ヨリ		如來前へ御備			
〃 5.7	銀	10枚	鳥取寺社奉行役人2人ヨリ		別當へ			
〃 6.27	白銀	10枚	濱田寺社奉行役人ヨリ		御見舞並に御代参旁々			

同じく寛政七年の〔回國順路記〕に於

一、先觸遣節右爲知札の事並佛餉袋出候程 兼而先役人より通し可申事 尤佛餉袋は其寺へ遣事 右之後へも開帳

日限等書付させ候事

何之何村  
信州善光寺 如來佛餉  
何寺

と形式が示されてある。一例として寛政六・七年の奉加を表示すると次の通りである。

(第八表)

これによつて物納されたもののうち米は賣却して代金を納め、他は殆んどの場合宿寺に遣わしたようである。又特に内開帳と稱する短時日の開帳では散錢、米等残らず宿寺に納めた例もあり勸化ではない結縁開帳のすがたを知るのである。

奉加金のうちから回國開帳の諸經費が仕拂われたが、宿寺に對する禮金、賄費及び善光寺からの伴人に對する給金等が主なる支出であつた。前表と同じ寛政六・七年の支出の數例を次に表示する。

(第九表)

但しこの他にも宿寺は善光寺開帳により何らかの形で相當莫大な收入を得たらしく、一ヶ所において二ヶ寺以上から開帳場の提供を申出で選擇に困つた例が幾度もあり、例えば寛政六年九月十日頃新潟で善導寺、長善寺の兩寺から申出があり、兩寺で談合の結果、

善導寺より長善寺江金子拾兩取候而御開帳譲り候由也

とある。故に少くとも宿寺では拾兩以上の収益を得たと推測される。



第 九 表

年月日	支	出	受 納	備 考
寛政6.10.18	金 〃 〃 青銅 青銅	300疋 100疋 200疋 30疋ツツ 30貫文 30疋ツツ	宿寺へ 役僧へ 取持中（扇子料） 弟子衆に 賄料 下部へ	泊・松林寺  20日間開帳にて
	金 白銀 金 〃 〃 鳥目 金 〃 〃 銀	10兩 7枚 500疋 100疋ツツ 〃 50疋ツツ 700疋 300疋ツツ 500疋 150貫文	宿寺へ（格別世話に なつた爲） 〃 信入院へ 宿寺出家 5人へ 宿寺小僧 1人 下部へ 惣取持中（扇子料） 隨喜寺院 3人へ 下宿へ 惣同勢賄料	大野・極樂寺  2日間開帳   賄料は寛文六年は1人文200文づつを原則とし宿寺へ差出している
11.21	銭 〃	7匁195文 40貫文	宿寺本尊前へ 賄料	大聖寺・願成寺へ 30日間開帳 焼香・手水場の散銭を差出
11.28	銭 佛餉米	38匁400文 8合入3800袋	宿寺本尊前へ 〃	福井・本瑞寺 5日間開帳
12. 4	銭 〃 〃	1匁500文ツツ 1匁600文ツツ 1匁600文ツツ	人足6人へ 老僧の陸尺4人	府中より善光寺へ10日間 御印文送りのため 御印文信州へ奉持の長持運び料 同 太儀料
寛政7.2.27	金 金 銭	30兩 45兩 150匁文	越年謝禮 新年開帳謝禮	越年宿寺（府中引接寺）  6年12月1日～7年2月27日逗留 7. 2. 11～7. 2. 25 開帳

	薪 100束 宿寺へ		
7.8.12	金 1,000疋 宿寺へ謝禮 銀 100貫文 宿寺へ御布施 金 10兩 宿寺へ本尊前へ 銀 300疋 弟子11人へ 3匁 連心者へ 200匁ヅツ 下部3人 金 500疋 惣取持へ(厨子料)	広島・誓願寺 10日間開帳	宿寺僧實として出したが宿料は領主よりの御馳走との事で御寺布施の名目に改める
7.6. 7	金 200朱 宿役人へ 金 2朱 田代	大森宿	

勸化金の出納は勘定方二名を中心としてその他の僧侶も立合いの上帳簿に記入して居り

一、散物取調之節は衆僧の中よりも立合但近習侍等も立合取調可申事

一、日々散物金子ニ致夜中ニ相納可申候、尤老僧納戸役等立合可申形ニ而受取候上致披露可申事

一、納金ハ納金致し入用拂方は別ニ帳面を以入用次第受取可申候 無左候而ハ出入勘定入組不宜候事

などの規定が「回國順路記」になされてある。

### E、第五回回國開帳豫定

以上四回の回國開帳の實態を通觀したが、その後天保年間にも回國の計畫が建てられた事を加附しておきたい。時あたかも十九世紀初頭すでに徳川の幕藩體制がゆらぎはじめ、外國からの脅威等によつて幕末の大變動期に突入しようとしていた時代である。而も爲政者は口に仁政を説きながらも民衆を冷遇して居り、未熟な生産技術や未組織的農業經營では少しの天候の變化にも忽ち影響をうけて凶作となり、重税を課せられる當時の農民層は雜穀の

かゆのみで漸く生命をつなぐ程の状態にしば／＼墮ちている。殊に東信地區の凶作は凡そ八年に一回の率でおそつて居り中でも寛永、天明、天保年間の大飢饉は深刻であつた。或いは暴動一揆を起し或は一家離散の流亡の民も多く、そのような不穩な社會狀態の中を如來を奉持して勸化に出立する事は自體暴舉と考えられたようである。

天保六年二月一日大勸進では東叡山准后宮よりの思召しもあるとて回國の豫定を立て公儀に願出る旨を大本願に連絡し、二月九日「信州善光寺本堂其外修覆爲助成」に來申年春より約六ヶ年間回國したいとの願書を提出した。

大本願からは回國中でも三都の内に於いて開帳あれば前例の通り當方も立合う事を申し送り、更にその場合京都では「大勸進心次第の場所」で開帳せられてよいが大坂では如來出現の地たる阿彌陀ヶ池の和光寺（大本願末寺）で開帳されたい旨の意見を申し入れた。所が寺中及び町方から

去ル巳年（文政十二年）より諸事高直（價）ニ付參詣薄ク寺中町方共難澁之趣承及候 此上如來久しく御留守ニ相成候ハバ年々參詣も薄く猶又一統困窮可相成哉と存候 云云〔如來三都回國〕

と、近來の不景氣に加え如來が他所へ出られればますます參詣者が減るであらうからの門前町全體の反對運動が始つた。

しかしすでに願書が出ていたので奉行所から「回國御免」が下り、五月大勸進の御勘定奉行は御料所御預所即ち松代藩に對してその旨報告している。その文中には〔同〕次の如く道中で心得などに至るまで詳細に述べてある。來申年春中信州發足甲州路へ東海道筋國々巡行先格之通京大坂ニ而三十日宛、五畿内中國筋九州四國巡行之上望の場所ニ而五日を限り 飯國之節ハ御當地罷出暫致逗留相願候もの江ハ本尊拜爲致 正月印文信州江遣下行掛り逗留致越年 壹岐對島佐渡三ヶ國迄ハ巡行不致來申年より年數六ヶ年限り巡行之積り 尤朝開帳施主開帳等も御

免被成下候ニ付散物等ハ押而不相勸 右人馬雇候共急度賃錢相拂權威ケ間敷様聊も不致相愼巡行之筈ニ候 右は  
寺社奉行中より達有之ニ付可得其意候 云云

散物即ち奉加金などを強要はしない、人馬を雇う事があれば賃錢を必ず仕拂い、威張つた振舞いをしない等と言明してある。

道中の人足や馬疋については「巡行用記」の寛政度の記録によつても

。今般如來御回國有之に付當十一月迄之内能登守領内も御通行可有之間御旅中差支無之様可取斗之旨先達而從 御  
門主様御頼之段江戸屋舖迄被仰越候ニ付 其節御挨拶申上候は御通行一通り之義ニも候ハハ人馬等之義は何分可  
申付候 云云（寛政六年閏十一月四日大野御領主土井能登守様御役人中よりの書狀）

。因先規之御例諸國御巡行御開帳御座候ニ付當寅八月より十一月迄之内松平越前守領内御通行被成候間其節御旅行  
無御支障様被成度段東叡山從 宮様被仰入候ニ付 云云（同十一月十三日小松宿、松平越前守寺社役よりの書狀）  
と東叡山門主から回國で通過する諸候の江戸屋敷に仰せがあり、各國元に指令が行き届いて居り繼立の手配がなさ  
れていた。宿驛によつては進んで人馬の運賃を寄進した所もあり、善光寺としては御印文寫しを授けたり彼らの名  
を留めて回向料にかえたりしている。例えば

。當宿より寄進人馬へ御印文寫一枚ツツ遣候様可致旨被仰付 且向後巡行常例ニ致記置候様との事（寛政六年十月  
二十二日柏崎にて）

。此度如來御順行ハ結緣專一其別（わけ）ニハ五重塔建立之志願ニ御座候 信心之輩有之御寄進も有之候得は 右人  
馬等之勞身之供養も有之事ニ御座候 右之譯故中ニは信心之人有候而も賃錢拂候得は無其儀 猶又夫々ニ賃錢も

多分之人故行届申間敷候 先觸は百人と有之候得共處ニより百五拾人も不足出候場所所有之候 左様ニ而ハ五拾人之分一向譯合不存身勞致候事故寄進帳ニ記右之回向等有之事ニ候 依而御心違無之御相談被下候様度致存候 此方より推而寄進勸候義ハ決而無之候 云云（同七年二月二十六日新保宿にて「人馬之掛合」の記録）

などあり「御通行道順問屋中共相談致候處一同御寄進可仕旨申請」た所もあり、又時には「去夏中旱拔ニ付百姓方難義仕候間當時御寄進之義難相成奉存候」と斷つてゐる所もある。東海道、中仙道以外の主要街道の各宿における定備人馬は二十五人二十五疋 脇街道やその他の宿驛では十人十疋或いはそれ以下であつて、人足百人（乃至馬の通らぬ山路などでは二百四十人）馬七、八十疋にも上る多量の繼立は問屋でも苦勞した事であろう。而も「寄進」の形にして賃錢を拂わねば直接努力や駄馬を提供した宿場や助郷の農民達の生活を忽ちおびやかす事ともなるので、決して強請的に申付けるような事はしない旨この時の回國願書でも言明してゐる譯である。

斯様に大勸進としては折角許可を得てゐる事でもあるので「老年には候得共來春より身命を賭して巡行」（如來三都廻國）するとの熱意をもつていたのであるが餘りにも反對の意見が多く、三寺中からは度々大勸進まで延期を願出た。

例えば

一昨年より百年ニも稀成困窮ニ而假湯（粥）勝に露命打續仕兩年之大難漸々凌出候得共（中略）秋歟來春にも如來尊御巡國被爲立候趣被仰渡誠ニ以倒惑仕候 重々奉恐入候得共春中奉願上候通三寺中始領内一統興廢之境ニ御座候得ハ御憐愍を以厚く被聽 出許ニ不抱兩三年御回國御延被成下候様幾重ニも一同奉願上候 云云（天保六年七月）と實情を訴えた。然し聞入れられないので八月ついに寺中代表が出府して開帳の延期を上野に願ひ出る程の強い世

論となつた。その結果上野執當中からの口ぞえもあり大勸進はついに翻意し、同年十月二十五日

先達而から持病の疝癰おこり種々療養加へ居り候へ共來春までに歩行覺束なく候間 出格の御思召を以て暫く出立を御猶豫成被下度（下略）

と公儀に回國開帳の無期延期を申出ている。病氣を理由としてはいるが、天保大飢饉にともなう世情の不安定、全國各地の食糧難など傳え聞いた山内の住侶が同行を拒んだ事、今一つには如來が久しく「御留守」となれば當然各地からの參詣者數も減少するので、宿泊や運送業務を生活基盤としていた善光寺町々民からの激しい反抗に屈したと見る可きであらう。

その後善光寺では天保十一<sup>1840</sup>年、弘化四<sup>1847</sup>年と引つづき金堂開帳を行つたが、後者の開帳期間中にいわゆる「弘化大地震」<sup>註21</sup>（又は「善光寺地震」とも言われる）がおこり、本堂山門大勸進を除く他のすべての建造物を焼失し、他地方からの參詣人をも含め約千三百人もの死者を出して、善光寺は勿論門前町全般が殆んど決定的打撃をうけた。爾後世情は外國との交渉の成行きにすべての人々が注目し國論が二つに破れていつた。やがて幕末維新への物情騒然たる時代に入るや、あらゆる既成組織が根底から動搖して、信濃の人々も一善光寺の經營にのみかかずらわつてゐる精神的餘裕を失つたのであらう。回國開帳は先の第四回を以て最後となつたのである。

### 三、結 語

斯様に通算十三ヶ年にもわたる長期を費し、殆んど日本全土を行脚勸化した前後四度の回國開帳はその都度相當の収益を得たよう、伽藍の建立や修覆など（五重塔建以外は）大體所期の目標を達成して行つた。善光寺興亡の

歴史即ち如來信仰の厚薄の度合は善光寺町そのものの隆退の歴史と規を一つにしており、戦國時代上杉武田織田豊臣各氏により約四十年間如來不在の間衰勢にいたつた善光寺町は、徳川三百年間の定住により挽回し次第に繁榮におもむいてゐる。<sup>註22</sup>

回國の大事業が逐次成就されたのは細密な計畫と、山内の二本坊三寺中が宗派を異にし多少の確執があつても「勸化開帳」という大目的に對しては私情をすてて一體となり事に處した協力のたまものと言えよう。全國的規模で行われた長途の勸化が遅滞なく運営されたのは公儀の配慮と、その蔭に働いた大本願上人の力によるものであつたと言つても過言でなからう。江戸京都大坂の三都開帳では朝廷や官門跡、將軍家をはじめ一般庶民に至る各層の歸依をうけたが、權力者階級と善光寺との仲介の勞をとつたのは多くの場合彼らと同階級の出身者たる大本願上人であつた。例えば出開帳に關する願書を提出する場合、正式な書類を兩寺役人三寺中から寺社奉行所へ差出し、同時に大本願上人からは私信を以て大奥御年寄衆へよろしく取計らいを願う旨の書狀を出し、時には音物を届けるなどいわば「裏面工作」をつとめられた。それによつて裁許が下され、奉行所或いは東叡山から各藩に對して開帳の件を傳達し「お取持ち」即ち便宜を計らうようにとの布令が出されたのである。各國々では大低の場合奉行所役人等が一行を出迎へ、足輕等を提供し、藩の重役の參詣、城主よりの寄進もあり、宿驛での人馬繼立や逗留宿寺の費用までも「寄進」「御馳走」をうけた例がしばしばある。

善光寺の名が近世中期までに全國的に悉知されたのは右のような大規模な出開帳の成果であらうが、更に本寺のみならずほぼ同じ時代に大本願直轄の末寺青山善光寺、大坂和光寺、越後十念寺や川口善光寺<sup>註23</sup>、信州の元善光寺等<sup>註24</sup>がそれ／＼自坊又は他所に出て開帳を行い、善光寺如來信仰を各々鼓吹した事實もものがしてはならない。

第十表 近世における善光寺系諸寺の開帳

寺	年月日	開帳場
青山 善光寺	享保九・ 宝暦五・四 〃 一一・四 安永六・ 天明三・三・一五〃 文化二・三・一二〃 〃 一二・七・一〃 天保一〇・三・三〃 嘉永三・三・二〇〃四・二〇	自坊にて 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 江戸回向院にて 〃 自坊にて
大坂 和光寺	寛延四・四・一〃五・一 寛政八・三・三〃四・三 宝暦九・ 安永九・三・一五〃 文化一四・二・三〃	自坊にて 〃 〃 江戸青山善光寺にて 〃 〃
越後 十念寺	寛政六	自坊にて、大本願什宝を借りて行う
甲府 善光寺	宝暦一・四・一〃 享保七	江戸回向院にて 〃
川口 善光寺	宝暦七・三・一〇〃四・三〇 明和六・四・七〃 安永三・二・一一〃四・一一	自坊にて 江戸回向院にて 自坊にて

(第十表)

二三四

法要の内容について見ると「如來三都廻國」や「三都開扉」などにある差定の記録では、三都においての開閉關の大會には天台宗あるいは淨土宗の本山僧侶多數の出勤があるので、それらの宗儀を嚴正に行つて「天下泰平國土安穩五穀豐穰の御祈禱」としてあるが、平日の御戸開帳や、回國中の各地では「十念回向」「お血脈お授」等をごく簡略に行つたようである。町人農民等の一般信者層を對象としての出開帳であるから彼らに應じて隨時雜修している。例えば。天台之正院家淨土宗増上寺伝通院幡隨院靈岩をはじめ皆々曰



信州元善光寺	寛政六・三・ 文化七・二・二〇〃 文政一〇・春 弘化二・三・三 嘉永五・四・二〃六・二 安政五・三・三〃五・三	〃 〃 〃 〃 江戶浅草大護院にて 自坊にて
	文化七・八・一〃	江戶護國寺にて

参したまへ十念回向を結縁ありけ  
 れば十宗不殘其外聞旦ハ後生とや  
 存られけん(中略)男女見奉り此御  
 方さへ如此況や我々にをやといや  
 ましに参ける(元禄五年)

。 開帳御差條(定力)も大念

佛にて参詣ハ貴賤群集を至し 云云 (元禄一七年一〇月七日)

。 壽命陀羅尼ハ難除御名號の授與(寛政六年八月一二日)

。 御出仕御開闢 御血脈願有之候所座敷無之庭上ニ並へ居三歸御十念斗日々三四度ツツ有之候(同年九月一八日)

。 (信者に下される爲、糸魚川にて表具師大澤住五右衛門へ) 百萬遍御名號表具五十幅被仰付候(同年十月六日)

。 御修法(寛政七年五月二四日)

など行われて居り、大勸進が所屬の天台宗儀にこだわらず各地で受け入れられ易かつた最も普遍的な念佛回向を、  
 専ら行つたのであらう。又佛教々義の眞の理解普及とは言えない安易な手法ではあるが、繪縁起講談を以つて如來  
 の大悲や勸善懲惡をとき、きびしい戒律よりも「御印文頂戴」や「お授け」を極樂往生の契約としてすすめた事が  
 都市農村を問わず善光寺信仰を普及せしめた要因であつたと考えられる。回國先の諸所で休泊や開帳場の提供を第  
 四表にも見た如く、あらゆる宗派諸寺院からうけている事も善光寺の超宗派的性格を反映している。

回國勸化の意義は單に一時的に所要の淨財を勸募したというのみに止まらず、勸募に應じた事が長く寄進者達の

惱裡にきざみこまれて、善光寺建立或は修覆に對して自分も一臂の力をそえたとの自覺や親近感をいだかせ、佛教建築への大衆の参加を現成し得た事にあつた。それが如來信仰と交々プラスし合い、諸堂建立の後には多くの地方人士に“一生に一度は善光寺詣”との愛著の心をもたしめる文字通りの結縁となつたのである。

## 註

- 1、「善光寺の江戸開帳について」佛教大學研究紀要第44 45合巻號
- 2、辻善之助氏「日本佛教史」卷九・第十五節及び「徳川實記」卷四三・四四・五二等參照
- 3、五來重氏「高野聖」（角川新書）參照
- 4、大成令續集十八。辻氏「日本佛教史」卷八・第五節
- 5、「嬉遊笑覽」卷七。「武江年表」等にみえ、善光寺江戸開帳中に幟・鳴物等に關する制限をうけた事は私稿（註）1の一五五〜六頁に記錄してある。

6、禪尼數輩來車禮近日可（所カ）聞三尊像近日京中道俗騷動禮拜云々、奉寫善光寺佛

7、又善光寺新佛觀覽事頻望申之、可爲如何哉之由、被仰之旨趣先目安依寫留之

信州沙門戒順謹言上

右根本善光寺前立新佛者弘聖菩薩、依如來靈告被造立之、其故者過二千年之後本尊可被移化緣於夷島、其後衆生濟度可留形像云々

然而去文明九年六月廿四日本堂炎上之時斯佛像燒失訖然而七日之後自灰中一立瑞雲、放光明之間諸人咸奇特思尋求之處此佛黃金御首灰中留給爰戒順發無二大願如元可奉鑄續之由蒙靈夢之間、測所願成否、於天王寺一七日令參籠祈精申之處、堺北庄致勸進可奉造立之由、重蒙其瑞夢之間於彼在所新調之文龜二年卯月八日、遂其節訖、仍本佛如來、任信州御下向之例、不違其道路、大和國橘寺奉遷之、其後南都奉入之、只今叡山坂本奉逗留之處也、欽明天皇御宇善光寺如來奉入禁中、有御觀覽任往古例御觀覽候之條、預啓達者、可畏入存之旨、謹言上如件、（中略）同廿日丁巳齊及晚雨抑々善光寺新造如來今日禁中奉入（下略）

8、「日本佛教史」卷八第五節に享保く天明年間に勸化を行つた約二百ヶ所の寺社名が列擧してある

9、この時までには文獻上明らかな罹災は治承三 1179・文永五 1268・正和二 1313・應安三 1370・應永三四 1427・文明六 1474・元和一 1615・寶永一

九 1642  
年の八回である

10、元祿五年八月五日。元祿十四年八月九日に例あり。「徳川實紀」卷四四にも記録がある

11「元祿雜記」〔如來三都回國〕などによると京都では比叡山・妙法院・誓願寺、靜花院（清淨華院）、百万遍・知恩院・青蓮院・聖護院・遣迎院・般若院・雲花院・圓福寺・毘舍門堂門跡・本門院僧正・禪林寺・光明寺・曼殊院門跡・西六條光照寺門跡・御室眞乘院・醍醐釋迦院等からの法要への隨喜、參詣や寄進があり、大坂にては百万遍・知恩院・黒谷・高野山寶性院・生玉南之坊・東本願寺・西本願寺等から同様の事があつた。又この時の京開帳で如來を青蓮院に迎へて門跡が拜された事は「覺恕法親王記」卷三二に詳しく見える。

12、長野縣立圖書館藏の今井家文書中には勸化金等出入の奉行所に對する届出書類寫しが多くあるが例えば（寶保元年）

覺

六月朔日より十日迄

一、錢五百拾五貫八百七拾貳文

諸勸化所散錢高

内

錢六拾壹貫八百文

天王寺大工方日雇方拂

錢貳百四拾壹貫四百七拾貳文

大坂松尾町松嶋屋兵右衛門方江諸入用拂方ニ相渡候

錢貳百拾貳貫六百元

日本橋北貳丁目油町貳丁目錢屋小四郎方江拂

三口合 錢五百拾五貫八百七拾貳文

右之通出入相違無御座候尤他所他國江

差遣不申大坂ニ而通用仕候右御届申上候

信州善光寺大勸進役人

今井磯右衛門

西六月十一日

同 役者

放 光 院

善光寺の回國開帳

## 御奉行所

という如く、殆んどの書面に「他所他國江差遣不申大坂ニ而通用仕候」とか「右之錢不殘。松尾町松嶋屋兵右衛門と申者方江相渡申候」等と記してある

- 13、「一遍上人と融通念佛」大谷學報卷四一・第一號及び「伊勢三日市の「おんない」と真宗高田派の大念佛」高田學報第四八號、參照

- 14、山内妻戸の寶林院を別名常念佛堂とも稱す。この堂は寶林院中興權大僧都孝榮法印（享保二年六月二三日寂）が重興したもので三万五千日乃至六万日回向はこの時からの常念佛日數に相當すると言われている。善光寺史研究會發行「善光寺史研究」（大正十一年刊）六三頁等參照。文獻的には吾妻鏡三二及び五一に善光寺の常念佛衆の記事あるのが古い例である。

- 15、岩下櫻園の著で原本は弘化の災害により失われたが傳寫本あり。

- 16、小林計一郎氏「善光寺と長野の歴史」48頁に寫眞版にて收録あり。寶永十九年炎上以前の本堂や兩本坊の配置が判る。

- 17、長野縣民俗資料調査報告七「信濃善光寺正月行事」に詳細な記録あり。

- 18、「日本佛教史」卷九・第一四節所收

- 19、「善光寺の江戸開帳について」一七一頁所收

- 20、「善光寺史研究」三三九頁所收の「華頂要略門主傳」に「寶政九丁巳年十一月四己巳日信州善光寺大勸進大僧都等順許紫衣着用令旨」の袖書として

善光寺別當大勸進現住大僧都等順御房

今度葉室大納言殿依御願御召古御輿網代立珊被下之候也

十一月四日

大谷法印業重 判

右御禮獻物以下金百拾兩差上坊官以下一統被領下

同月廿二丁亥善光寺如來入御有御拜大勸進隨從於黑書院御對面賜口祝本尊白銀三枚御備有之御門主一統拜禮

- 21、弘化四年三月二十四日。倒潰家屋二三五〇軒（うち二一九四軒は火災）、大本願・仁王門・山内宿坊等すべて罹災、如來寶龕は箱清水村地藏畑に一時遷したが金堂は破損のみで八月には修理をおえ奉還し得た程度であつた。

- 22、平沼淑郎氏「近世寺院門前町の研究」参照
- 23、埼玉県北足立郡川口町にあり、新義真言宗、建久六年の建立。
- 24、長野県下伊那郡座光寺村にあり、本田善光が如來を最初に臼上に安置した私宅のあとの伝説あり、現在天台宗に属す。
- 25、この表は主として「奥日紀」及び武江年表により作製した。



# 地図A 回国開帳巡路 元禄・延享 安永・寛政 四度通覧

